

---

# 青春という名の日々に

tensuke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青春という名の日々に

### 【Nコード】

N9344D

### 【作者名】

tensuke

### 【あらすじ】

玉木宏さんをモデルに書いています多感な高校生活を過ごす二人の少年と一人の少女のそれぞれの視点から青春時代の甘酸っぱい恋愛を描いていきたいと思っています

## 1・大沢たかし 最初の一步（前書き）

登場人物は玉木宏さんがモデルの「寺山宏クン」と大沢たかし少年　そして少女一人　それぞれの視点で各章を綴っていきます　お付き合い下さい

## 1・大沢たかし 最初の一步

### 1・大沢たかし 最初の一步

「爪 自分で・・・切っただろ・・・」 卒業証書の入った筒を握る指先を見とがめた

「普通 自分で切るものじゃない？」 指先をこちらにかざしながら彼が答える

「深爪してる」

「そお？」

「器用なのに こういうところ 無頓着だよな・・・」

第2ボタンのみならず 全てのボタンをひきちぎられた学ランを

お互い埃でもたたくように整えながら ようやくふりきり逃れてきた喧騒を振り返る

「気にした事 なかったよ」 少し息を切らせながら 誰もいない所に逃げ切れた安堵に

彼はその頬を紅潮させながらもようやく緊張のとけた笑みをみせた  
「綺麗な指なんだ・・・とっても だから 爪も少し気をつけて・・・」

桜の木が立ち並び 校舎の影になった一画にたどり着き ほっと二人でため息をついた

「女の子じゃあるまいし（笑）どう気をつけるっていうの」

「俺が・・・俺が切ってやる 今度からは」

今度から が本当に続いてゆくのか判らない別れの日に こんな台詞が口をついた

「ええっ！？（笑）子供じゃあるまいし それはないでしょ」

「お前は 俺のものだから」 できるだけさりげなさを装って言うてみた

「そおなの？（笑）知らなかったかも 俺」 思った以上に軽くし

れつと返された

「そう 爪の先まで全部 俺のものなの」 ひるみかかった心にムチ打った

くすりと小さく笑った彼の指先をそつと包み込むようにして握った手に力をこめた

彼は引かれた手から崩れるようにして笑いながら倒れ込んだできた彼を胸に抱き止めて 握った指先に口づけた

くすぐったいからやめてくれ と 彼はまた小さく笑った抱き締めた しなやかなその身体を離したくなかった

ごわごわとした制服越しに 自分の心臓の鼓動が激しく響いているのを

彼に気づかれてしまったに違いない

鼻先をくすぐる 柔らかい茶色の髪からほのかに甘い香りがした

くすぐすと笑い続ける彼を胸に抱き止めたまま 時が止まればいいと思った

桜の花びらが舞う中で 自分の目の前にいる生き物は信じられない程に とてつもなく美しかった

その美しい生き物を 誰にも渡したくない そう思った

白く小さなその顔にそつと手を添えると 彼は小さく首をかしげてこちらへその面を上向けた

「何?・・・どうした?」

小さな彼の問いかけに答えるかわりにその桜色の唇を奪った

「・・・んっ・・・」

かすかに抗う彼の肩を引きもどし 唇の重なりを一層深くした

遠く 新生活へのスタートを励まし合い 別れを惜しむ声たちが響

いていた

卒業式

彼の友人という名の仮面を被って過ごした3年間は終わりを告げた

「お・・・大沢・・・ど・・・どういっつもりで・・・おまえっ・・・んっ・・・」

彼の戸惑い困惑した表情を見つめながら口づけを繰り返した

逃れようとものがくその細い腰を抱き寄せたまま

これで 何が変わるのか

自分でも 何も思い描けなかった

ただ 目の前の彼を 失いたくなかった

あの日

無理矢理に踏み出した最初の一步

今でも鮮明に思い出す

## 1・大沢たかし 最初の一步（後書き）

ご感想・コメントなどお寄せ頂きますと  
今後の励みになります  
よろしくお願い致します

## 2・私・彼らの事

### 2・私・彼らのこと

愛する人がいて 愛されて自分の居場所を約束された人間は  
贅沢で我が儘で自分勝手である

愛は穏やかで暖かく 日向の水溜りがぬるまるように  
ただそこにあるだけで心が暖められて  
ぬくぬくと縁側でまどろむ猫のようなおもちになる

そして愛し愛されることに慣れてしまった人間は  
愚かにも その平和な日々を無意味で退屈な時間と勘違いする  
そして 恋といういばらの日々を懐かしみ  
その響きに憧れる

恋とか初恋とか 失恋に片想い  
そんな言葉たちはキラキラと美しくて眩しくて  
淡雪かもろいガラス細工のように はかなく繊細だ  
それでいて それらはとてつもなくしなやかに強かで  
その期間限定な輝きは残酷だ

家族を持つ という事の意味を漠然としか理解していなかったあの頃  
その生活に憧れに似た思いすら抱いていたあの頃  
恋という病の真っ只中にどっぷりと浸っていたあの頃  
あの頃は 愛という穏やかな響きに夢見ていたのだと 今思う

愛は穏やかで暖かい  
相手を思い遣る心が伝わりあう時



静かに　ただ　静かに時は流れる  
彼らもまた　こんな穏やかな時間をいつか手にいれるのだろうか  
そしてその時　彼らの傍らには　いったいどんな人が微笑んでいる  
のだろうか

彼らを思い出す

平和で単調な　平凡な日々の生活の中

彼らを思い出す

彼らは私の思い出の中で輝いている

恋と言う病の特効薬はとつくの昔に処方された

それは今以上を望まないこと　今を愛する事

そして　何かをあきらめること

そんな免疫はしつかりと培養され

今の私に恋というその病は取り付かない

そうした　穏やかで呑気な胸の中で　小さく小さく

ちくりと痛んで彼らがよみがえる

あの頃・・・・・・・・

彼と私ともう一人の彼がいたあの頃

懐かしいような　寂しいような　甘酸っぱい気分がこみ上げる

恋した少女と

恋された少年と

そしてもう一人の恋された少年の

今なら判る　今なら思い遣ってあげられる

私のちくりと痛む思いの話

書き留めて　心の外に出してしまおう　そう思う

## 2・私・彼らの事（後書き）

コメント・感想など頂きますと今後の励みになります  
よろしくお願い致します

### 3・青春時代

#### 3・青春と呼ばれる時代

映画のヒロインが言った台詞　「好きな人が好きなヒトを好きになりたい」

私の恋のはじまりは　きっとこのヒロインの台詞そのものだった  
ただひとつ違ったのは　好きなヒトの好きなヒト　も私の異性だった

だから

もしかして　映画のヒロインより　ちょっと複雑で

でも　ヒロインよりも　その人を好き　になるのは簡単だったかも  
しれない  
なにしろ

私が好きになったヒト　も　その人が大好きだったヒト　も  
素晴らしく見目麗しい美少年たちだったから

私は二人を同時に恋する事に　たいして困った事も大変な事もなかった

私たち3人は同じ高校の同級生だった

私が最初に恋した美少年は　大沢たかし　という名前の大柄な少年だった

彼は野球部のエースで学年トップの座を誰にも譲らない秀才だった

彼は同級生に限らず　先輩後輩　先生に至るまで人望も厚く

裏表のない穏やかな性格の　正義感と責任感にあふれた少年だった

私は　友人たち数人と共に　ミーハーなファンクラブのように彼を見つめていた

そして バレンタインデーにはチョコレートを贈った

彼はニコニコと女子たちからのチョコレートを丁寧なお礼と笑顔で受け取った

そして ホワイトデーには 母親が用意してくれた と言葉を添えて頬をつつすらと染めながら 律儀にもキャンディーの袋を配って歩いた

そんな彼に私は淡い恋心を抱いていたのだと思う

そして 彼に憧れる少女たちの中から

どういう訳か 私は少しだけ特別なポジションを手にいれた

それは 私の幼馴染みに所以する

その彼は 寺山宏といい 水泳部の主将をしていた

大沢は 私を放課後に呼び出すと チョコレートのお礼とともに丁寧に私の思いに応える事はできず 恋人にはなれないと告げた

そんな大それた期待は持ち合わせていなかった私は

理由を問うつもりもなく はいそうですか とその場を去ろうとした

そして呼び止められて でも限りなく近い友人にはなれると思うむしろ 積極的に そうなりたいのだと告げられて驚いた

なぜ？

その疑問に大沢は正直に私に告げた

秘密を共有してほしい と

憧れの美少年から秘密を打ち明けられる

そんなシチュエーションは私の中で背景にバラの花を背負っていた憧れの美少年の秘密

それはぞくぞくするほど刺激的で 私の好奇心を刺激した

私は二もなくその秘密を共有し かつ秘密を厳守することをその場で誓った

大沢が私の視線を斜めに避けながら 俯いて打ち明けた秘密  
それは 私のごくごく近い仲良しの幼馴染である寺山宏に  
大沢が友人以上の感情を抱いている という事だった

寺山宏は 少女と見紛う程の端正な顔立ちの少年だった  
長い睫に縁取られた薄茶の大きな瞳は無垢な草食動物を思わせた  
細い首と長い手足をもてあましているような  
しなやかな長身であった

少年期特有のどこか性別を超越したような中性的な雰囲気を纏い  
水泳部の主将として太陽の照りつけるプールサイドに立ち続けてい  
ても  
その肌はぬけるように白く滑らかだった

宏の声は耳に心地よく響く甘い低音で  
その声だけが どこかその少女めいた外見を裏切って  
不思議な魅力を放っていた

そして何より その性格はいたって素直で温厚  
自分のずば抜けた容姿の素晴らしさにもまったくの無頓着であり  
どこか繊細そうな線の細いその少女めいた外見から

大沢のように女子たちからの熱い視線に常に追い回される  
というような事はなかった

それでいて 寺山君は綺麗 という不思議な人気を誇っていた

家が近い事と 両親同士が昔からの友人ということもあり

宏と私は生まれた時から 事あるごとに行動をともしにする幼馴染だ  
った

幼稚園 小学校 習い事に至るまで

性別の違いを除けば ほぼ全ての面で 私と宏はいつも一緒だった

よくも悪くも平均値に甘んじる私と違い

宏は小さい頃からその天使のような可愛らしさと素直さで私と性別が逆だったらよかったのにと 随分なことも言われてきたそれでも 宏本人の性格の良さにカバーされ

私は宏と比べられても何をしてもしじける事もくじける事もなくただただ仲のよい異性の幼馴染といつの間にか

中学 高校に至るまで その進路をともしてきていた

あまりにも近くにすぎたせいかな

私は宏に異性を意識することがなかった

また 宏はそれほどに 18になろうかという年齢に至っても尚男臭い様子が微塵もなく

ただ透明な ガラス細工のような美しさで存在し続けていた

大沢は 高校に入学してすぐ

特別クラスで同じクラスになった宏の存在を認めていたという

最初はただ やけに綺麗な顔の奴だなあと そんな感想だったそうだが

それがいつしか 気づくと宏の姿を目で追っている自分に気づいたのだそうだが

クラスが違ったため 教室での宏の様子は知るよしもなかったが

時折催される特別クラスや 部活の時間などに その姿を捜していたそうだが

きっかけはなんだったのか？ と尋ねた私に

大沢は ひどく照れくさそうに応えていった

宏が大沢の落とした消しゴムを拾い上げて渡してくれた時

その細く長い指先があまりにも綺麗で見とれてしまったのだそうだがそして 視線の先に待ち構えていた宏の笑顔に釘付けとなり

その日は夜眠れないほどに宏の笑顔が脳裏に焼きついたのだそうだが

恋と言うのは 本当に「落ちる」もののだと  
その時実感したのだそうだ

ともかくにも

私は 学年の いや学校きつてのヒーローである人気者の  
大沢たかし少年の秘密を共有することになった  
それはすなわち 私を挟んで 大沢は宏と親しい友人になりたい  
そのために私にチョコレートのお返しに  
他の少女たちよりも特別な 彼の仲のよい友人 というポジションを  
与えてよこした という事だった

これは 平たく言つて 失恋なんだろうなあ と  
私はその時思つた

でも 不思議とあまりショックではなかった  
恋と言う病に冒されていたというよりは  
恋する事に憧れていたただだったのかもしれない  
そんな事も案外冷静に思つたりもした

それでも

今まで何とも思わず近くにいて仲良く過ごしてきた宏はともかく  
友人たちときゃーきゃーと騒いで見つめていた大沢と  
急激にその距離を縮めた事に変わりはなく

それはそれなりに 私にとって喜ばしい事ではあつた

また 友人たちにそれとない優越感を覚えたことも事実だった

大沢の秘密を打ち明けられたホワイトデーを境に

大沢と宏と私の3人は 何かと共に連れ立って歩く事が増えた  
登下校はもちろん 宿題を図書館で一緒にやつつけて

その後 駅前のファーストフード店で他愛のない話をして笑いあい

大沢や宏の部活が終わるまで 私はどちらかの見学をして過ごしたりもした

試合があれば 差し入れを持って応援にも行った

傍目に見たら 今まで通り 仲のよい私と宏の二人に

大沢が加わった友人関係 そう見えていたに違いない

私は 密かに自分だけが知る 大沢の秘密を楽しんでいた

しかし 正直なところ私は 大沢の思いが成就する という展開については

全く考えていなかった

というよりも 自分を介して 見目麗しい二人が友人となった事だけで

もう大沢の望みは叶えられたものとさえ思っていた

私には 大沢の苦悩を思い遣る気遣いはなかった

思い至らなかったというのが正直なところだ

大沢が どれだけ宏の事を思っているのか

あの頃の私には 気づけずにいた



### 3・青春時代（後書き）

コメント・感想など お寄せ頂きますと  
今後の励みになります  
よろしくお願い致します

#### 4・恋する事 愛する事 求める事

##### 4・恋する事 愛する事 求める事

都内のそこそこの通った進学校だった

私は宏にひきずられるようにして いや ひっぱってもらいながら  
中学3年の夏から本腰を入れたという遅いスタートにも係わらず  
その文武両道を校訓とする歴史在る高校への入学を果たした

宏は目立つ程の成績を納めないかわりに

まんべんなく そつなく全ての教科を平均点以上の成績ですぐす  
という

不思議な特技を持っていた

そして何よりも 試験の山かけが奇跡のようにうまくいった

私の高校入試も前日に宏から示された予想問題が

見事に当日の問題用紙に踊っていた事が勝因であった

私はそもそも学業はごくごく普通の生徒であり

また 有名大学への進学を希望する生徒でもなかった

唯一進路の希望があるとすれば

好きな絵を描ける美術系の学校へ進みたいと秘かに思っていた  
しかしそれも将来の展望などひらかれるたちのものでもなく

女子の美術屋などというものは

つぶしもきかなければ 職もないのが現実であり

私も結局は就職のありそうなデザイン系の学校へと目標を定めた

高校入学とほぼ同時に 3年後の進路を決めさせられるのも

この進学校の特徴でもあった

そして同時に 生徒達は何かしらのクラブ活動への参加が義務づけ

られており

文化系・運動系にかかわらず それらは 授業の単位と同等の評価が下された

その分 授業はそれぞれの生徒の希望する進路にそってすすめられきめ細かい指導もあり 例年 卒業生たちは華々しい結果を残していった

私は正直なところ

この学校が自分にとって相応しくない場所のように感じていた  
芳しくない成績を自覚していた事もあり

宏がいなければ 不登校の生徒になっていたかもしれない  
毎朝 にこやかに登校を促しにやってくる宏に連れられて  
私は 毎日重い足をひきずって登校していた

そんな私が 学校を楽しいと思うきっかけになったのが  
かの 野球部主将の大沢たかし少年であった

所属する美術部の同級生に誘われて見学に行ったグラウンドで  
私は一目みるなり 彼の 大沢少年の姿に心を奪われていた  
それは私のキャンパスに描かれる彫像たちをしのぐ

均整のとれた美しい筋肉に覆われた肢体  
そして 不思議な力を宿した切れ長な黒い瞳  
きりりと結ばれた形のよい薄い唇

私は頭の中に一瞬のうちに彼の姿を写し取っていた

その日の帰り道 私は宏に大沢少年の事を夢中で語った

宏は静かな微笑みを浮かべたまま 私の興奮がおさまるまで  
じつとその話に耳を傾けていてくれた

結局 私は友人たちと共に大沢少年の大いなるファンになったのだと  
宏に熱く訴え それは家の前に辿りついても尚語り尽くせず

私は宏の腕をひっぱって家へと引きずり込み

晩ご飯を共にする事を強要し 食事が終わるまでしゃべり続けた

呆れたように肩をそびやかす母親とは対照的に

宏はそれでもイヤな顔一つみせずに 時折ニコニコと頷きながら  
私の話を最期までちゃんと聞いてくれた

### 幼馴染み

そんな響きは正直ぴんとこない

お互いに一人っ子だった事もあり 私と宏はまるで双子のようだ  
両方の親も そのどちらかが家にいればよいとまで思っているふし  
もある程

どちらの家で 何をしようと何も言われなかった

そして 食事もまた どちらの家ですませようと何も言われず  
ただ歓迎された

宏の両親は女の子が欲しかったといい 私を可愛がり

私の両親もまた男の子が欲しかったといい 宏を可愛がった

お互いの初恋の話も語り合った事があった

宏は中学の同級生で おとなしくて可愛い女の子に恋をした

私はこっそり二人の仲をとりもとうと画策してみたが

残念な事に宏の恋は実らなかった

彼女の答えは 宏君は優しすぎるから という不思議なものだった

私の初恋は小学校6年生の時だった

新学期にやってきた転校生に恋をした

しかし彼は夏休みが終わる頃にはまた別の学校へと転校していった

宏は夏休みの間中 私とその少年を誘ってプールへと出かけた  
一緒にいたくたになるまで遊び スイカを食べて 花火をした  
幼い恋は楽しいばかりの想い出になった

そして今 宏は私にっこり言った

「大沢君はホントに格好いいよね 絵のモデルにはもってこいだ」

宏は私の想いが恋ではないと知っていたのだと思う

憧れと恋は微妙に違う

お気に入りと言っても少し違う

好き は好きでも 犬も好き 猫も好き お花もチョコも 彼も好き

私の呑気な想いは宏にはお見通しだったようだ

そしてくだんのバレンタイン

私は友人たちの勢いに飲まれて その場の雰囲気のにせられて

大沢少年へのチョコレートを調達した

思いもしない展開がまっとうとは 夢にも知らずに・・・

#### 4 ・恋する事 愛する事 求める事（後書き）

感想・コメントなど頂けると

今後の励みになります よろしくお願い致します

## 5・私・彼ら 高校の3年間

### 5・私・彼ら 高校の3年間

大沢少年がマウンドに立つとギャラリーから黄色い声援がとぶ  
グラウンドを取り囲むフェンスの金網に すぐるように集まった女  
生徒たち

私もその中の一人として 彼の雄姿に熱い視線を送っていた  
それが抱えたスケッチブックに彼の姿をとらえる為であったとしても  
私もまた彼を好ましく思い 憧れに似た気持ちでいた事に間違いは  
なく

当然のように 周囲の友人に誘われるがままに  
その年のバレンタインデー

私は 大沢少年のためのチョコレートを選んだ  
高校1年の春だった

季節はめぐり かわらぬ毎日ですごしながらも確実に時間は過ぎて  
いった

私たちは高校2年の新学期 3人が同じクラスになった

大沢少年の堪えきれずに溢れる嬉しそうな笑顔が眩しかった

担任教諭の「好きな場所に座って良い」という言葉が終わらないう  
ちに

大沢少年は宏の隣の席に陣取っていた

多くの女生徒たちが大沢少年の近くに座席をとりたがり  
私もまた 皆にまざって その席のためのあみだくじに参加した  
宏はただニコニコとそんな大騒ぎを静かに見つめていた

その年の夏

夏休みに入ると同時に宏の両親が離婚した

宏が高校に入学してすぐ 地方へ単身赴任となっていた父親が若い愛人と暮らし始めていたことが原因だった

宏は沈みがちな母親を気遣って 随分と明るく振る舞っていた  
予てから出張だの何だのと家をあけている事の多かった父親だから  
いなくなつたところで今更寂しくもない

そう言つて 宏は心配する私たちにも笑顔を見せた

しかし 実際の所 宏もまた深く傷つき悩んでいたのだらうと思う

宏の母親は離婚後半年で身体を壊し 入院した

父親側に一方的な非のある離婚であつたため

宏と母親には十分な慰謝料と養育費が支払われていた

母は与えられた養生の場で十分な治療を受ける事ができた

実質 一人暮らしになつてしまつた宏を心配した私の両親は  
時間を作つては宏の母を見舞い 宏の世話をかつてでていた

さすがに同居する事にまでは首をたてに振らなかつた宏も

できる限りは自分一人で作つてゆきたいと思うが

厚意はありがたく頂いて お世話になりますと深々と頭を下げた

宏の母の病状は一進一退をくりかえし

そうするうちに 鬱病を併発するに至り 医師の説明によれば  
自殺の恐れがあるため 退院させる事はできない との事だった

夏休み中はほぼ毎日のように そして新学期が始まつてからも  
放課後 宏に付き添い 私と大沢少年はよく宏の母親の見舞いに行  
つた

私たちの顔を見ると 彼女は嬉しそうに昔と変わらぬ穏やかな  
優しく美しい笑顔を見せた



いつの頃からだろうか

宏は ただ静かに周囲を観察する 口数の少ない少年になっていた  
どこか達観したような 年齢よりも大人びて見える少年に・・・

宏の母親が入院した年の秋 私たちは京都と奈良へ修学旅行へ行った  
これが終わってしまうと あとはもう大学受験にむけて  
本格的な勉強勉強の日々がやってくる

私たちは 高校生活最期となるイベントを楽しみにしていた

京都・奈良ともに観光名所といわれる場所を巡った

事前に構成されたグループごとに 私たちは寺や茶屋をきままに廻  
った

大沢は常に宏の傍らにあり 穏やかな笑顔で宏を見つめていた  
母親に土産を選ぶという宏に付き合っ

て 私たちは小さな土産物屋に足をとめた

可愛らしい布で作られた小物達が出迎えてくれた

宏は自分の母親と 私の母にもお揃いで可愛いがま口を買ってくれた  
二人の母に育てられているようなものだからと照れくさそうに笑った  
そして 自分のために小さな練りリップクリームを買っていた

大沢が不思議そうにそのリップを手にとって眺めているのを

宏は可笑しそうにニコニコと見つめていた

宏は大沢のどことなく真面目で朴訥とした所を面白がっている節が  
ある

大沢の方でも 宏にかまわれるのはイヤでもないらしく  
いつも何を言われてもおとなしく受け止めていた

私は 時折この大沢少年と共有しているはずの「秘密」を忘れそう  
になる

それ程に 普段の大沢少年はいたってあたりまえに  
ごくごく自然にあたりまえに宏の傍らに存在し  
ただただ仲の良い親友同士にしか見えなかった

大沢が宏に恋をしている

私はその秘密を知っている

そして 大沢のために 二人の距離が縮まるようにと友人の輪を広  
げた

共犯者？協力者？

私は就学旅行の企画実行部にも立候補した

二人の宿泊部屋を同室にするよう画策するためだった

そして見事 私は 京都も奈良も 宿泊するホテルでの  
ツインルームを 大沢・寺山同室にと裏工作に成功していた

「大沢君……」

「なに？」

「この借りはしっかり返してもらいますよぉ」

「……えっ？」

「同室にしてあげたんだからね……とぼけないでよ」

「あ……そうだったんだ……やけにくじ運がいいなあって思っ  
てた」

「単純なんだから……いつもながら で 宏にはナイショだから」

「うん ありがとう」

「あした どこかのお茶屋さんでご馳走してね（笑）」

「わかった」

「でも……襲ったりして嫌われないようにね（笑）」

「おっ……おそつたりしないよ……たぶん」

「たぶん」

「うん……努力する」

「ははは（笑）」

私は実のところ この時 少年が少年に恋する心理をあまり深く考えていなかった

二人がどうこうなる などというイメージさえ浮かばずにいたただ もし自分が好きな人と同室だったら嬉しいだろうなあ・・・そういった 実に子供じみた単純な思いのみが心にあったように思うだから

そんな私の余計なお世話が 大沢少年の心を大いに揺さぶり悩ませ苦しませる事に

なろうとは 思いもよらない事だった

三泊四日の旅は 大沢にとって まさに据え膳おあずけ状態だったワケで

17歳の少年には過酷な試練だったに違いない

残念な事に 後にも先にも 私はこの時の話を大沢少年から聞く事はなかった

宏もまた 何も語らず

おそらくは 何事もなく 大沢少年ただ一人を眠れぬ夜に縛り付けた旅であった

## 6・大沢たかし・恋に悩む日々を

6・大沢たかし　恋に悩む日々を

高2の秋　高校生活最期のビッグイベント　京都・奈良の就学旅行  
があつた

「指で唇に塗るんだよ」

「へえ．．．．．柚子の香りがするんだ．．．」

「俺　いつも冬になると唇がガサガサになるから」

「へえ．．．．．」

「大沢はならない？」

「．．．．．気にしたことなかった．．．．．」

「タバコ　吸つてると余計になるよ」

「えっ？寺山　タバコ吸つてたっけ？」

「はははは（笑）やだな　大沢の事いつてるのに」

「俺？．．．ああ．．．そうね」

「タバコを吸う女の子はよくないよあ　肌も荒れるしキスが苦くなる」

「．．．．．えっ．．．．．」

「はははは（笑）」

「なっ．．．からかうなよ　寺山」

「ははは（笑）　ああ　でも二人とも吸ってたら気にならないのかなあ．．．．．」

観光名所を巡り歩き回っていた途中　立ち寄った土産物店で

宏は俺に見せつけるようにして　試供品のリップクリームをその長く  
綺麗な指先で自分の唇に塗って見せた

宏の　男にしては少しふつくらと厚い唇が　ふるりと桜色に艶やいだ

俺は目の前の指先と唇から視線が離せなくなった  
頭の中が白く霞むようだった

タバコ？キスが苦くなる？

二人とも吸ってたら気にならない？？

どうして俺にそんなことを言うんだ？宏・・・俺の気持ち・・・知らないで・・・

大沢の思いは千々に乱れた

そんな大沢の思いを知ってか知らずか

宏はリップクリームを塗った唇を尖らせるようにして  
隣にたつ大沢の顔を見る

「て・・・寺山？」

「んっ ほら このクリーム気持ちいいよ」

そう言って 宏は艶然と微笑んだ

そして 何事もなかったように 店の中を見回すと

古い着物の生地で作られた可愛い鹿のぬいぐるみを手にとった

「これかぁいいいなあ 何色のにしようかなあ・・・」

「えっ・・・買っの？」

「だめ？」

「だ・・・だめな事ないけど お土産？」

「いや 俺の」

「寺山・・・の・・・」

「うん」

可愛いな・・・そう思った とてもとても愛おしかった

俺のこんな想いを宏は知らない

ただ一人 俺の宏への想いを胸におさめている彼女

彼女は宏の幼馴染み

俺は初めて彼女と宏が並んで歩く姿を見かけた時

心臓をじかに鷲掴みにされたようなショックを受けた  
宏のガールフレンドだと勘違いしたせいだった

その後 彼女が俺にバレンタインデーのチョコレートをくれるに至り  
俺は宏と彼女の関係を知った

そして 俺は姑息にも彼女に全てを打ち明けて  
どうにか宏の傍らに自分の立ち位置を手に入れた

さして時間もかからずに 俺は二人と親しい友人になった

宏が俺に寄せてくれる信頼と 向けてくれる好意は友人のそれだ  
親友 という響きが俺にはとげとげしく胸に刺さる

そんなものになりたいんじゃない

俺は

俺は宏をこの手に抱きたいのだ

宏の白いうなじが目の前にある

真剣な眼差しで 可愛いなあとおつばやきながら  
ぬいぐるみを選んでいる宏の後ろ姿

俺より少しだけ背の低い宏のうなじが 少し見下ろす目の前にある  
吸い寄せられそうな白い滑らかな肌

このうなじを 少しきつく吸ったら

白い肌に きつと淡い紅色の花が咲くだろう

あの唇をそつと吸ったなら 甘い吐息がこぼれるだろうか

この腕の中に抱き締めたら

あの胸元にひっそりと息づいている小さな果実を啄んでみたい  
いつか部活の後 大浴場でみかけた宏の裸身が蘇る

ひきしまった腰 男にしては丸く形の良い小さな尻には小さなえく  
ぼがあつたつけ

そんな不埒な想いに沈みかけた時  
ふと振り向いた宏の瞳と視線が合った

何もかもを見透かされているかのような　その艶めいた視線  
（俺を抱きたいの？）

そう挑発しているかのような宏の眼差し

ありえない

ありえない

宏は俺の気持ちなど知りはない

高鳴る胸の鼓動が　宏に聞こえてしまいやしないかと

俺は無意識に店の外へと踵をかえす

「待つて　大沢　これ買ったらいくから・・・」

「・・・そ・・・外で待つてる」

「うん」

背後からかけられた宏の声から逃れるように店を出た

いつか・・・いつかこの想いを

自分で持て余し　手放すのか

それとも

いつかこの想いを宏にぶつけてしまうのか

その時

俺たちは　どこへむかっていくのだろうか・・・

## 7・大沢たかし 月夜に

7・大沢たかし 月夜に

京都の月夜を見上げていた

ホテルの窓は小さい

高校生が大挙して逗留できるようなホテルはさして多くはない  
それはそう大きくもないビジネスホテル  
駅から近いのだけが取り柄だろう

ツインといっても 狭い部屋にベッドがぎゅうぎゅうに二つ  
トイレも一緒のユニットバス

旅行の荷物をほどくスペースもない程の部屋で  
俺と宏はそれぞれのベッドの上にいた

窓際のベッドに陣取った俺は ベッドに腰掛けて窓から見える月を  
見上げていた

宏はシャワーをつかう準備をして ベッドを降りていった  
ほどなく シャワーの音が響いてきた  
いやでも脳裏に宏の裸身がよぎってしまう

今 あの扉を開けて押し入ったら 宏はどうするだろうか  
押し入って その白く滑らかな肌を抱き締めて

触れたい  
触れたい

この手で……触れてみたい

身体を中心に全身の血液が集まるような熱を感じていた

「大沢あゝ お先に シャワーどーぞー」

「あっ……ああ……ありがとう」



そそくさと着替えを掴むと宏と入れ違いにバスルームに入った  
すれ違う時に 濡れ髪から甘い香りが零れた  
目眩がした

短パンに素足 上半身にはバスタオルをはおっただけの姿  
頭からかぶったそのタオルで濡れ髪を拭いている

ベッドに腰を下ろした宏と視線が絡む

「なに？大沢・・・」

「いや・・・なんでもない・・・シャワーもらう」  
「ん」

そんなに無防備な顔を見せないでくれ

そんなに無防備に俺を誘惑しないでくれ

お前の身体からは蜜の香りがする 匂い立つような色気に目が眩む  
同性の裸身にこんな困惑するなんて

頭がくらくらする

俺は冷ための湯を頭からかぶった

バスルームから出た時

宏はベッドカバーもはがさないままに 大の字に寝ころび  
すうすうと穏やかな寝息をたてていた

俺はその傍らにしばし立ち尽くしていた

綺麗な寝顔だと思った

長い睫が白い頬に淡い影を落とし

細い鼻梁に続くふつくらと紅い唇がうつすらと開いている

禁断の果实だ そう思った

部屋の電気を落とすと 宏の足元からベッドカバーをめくると  
そつと肩までひきあげてやった

小さな伸びをしながら むにやむにやと寝ぼけた声が聞こえた  
可愛い

押さえきれない衝動に突き動かされて 俺はそつと顔を寄せた  
唇が重なる瞬間 身体に電気が走った気がした  
柔らかくて 甘い唇だった

天使のような寝顔なのに その魔性の罨にとつぷりとハマッた  
俺はもう逃れられない  
逃れようとも思わない

一生 この美しくも妖しい生き物の虜なのだ

三泊四日 後にも先にも 俺が妖しい衝動に負けたのは  
この一回きりだった  
けれど

そのかわり 俺は最終日まで眠れぬ夜を過ごし  
帰りの新幹線は 宏の肩にもたれて爆睡するという醜態をさらした  
ヨダレを垂らさなかったのがせめてもの救いだ

この旅行で 宏の甘い香りが

彼の愛用のボディークリームの香りだと初めて知った

乾燥肌なんだ そういつていたっけ

鼻をくすぐる甘い香り

ある意味トラウマになるな

これから先ずつと この香りを嗅ぐと 犬のように俺は

反射的に宏を想いだし そして全身の血が滾るのだ……

修学旅行 甘く切ない青春の想い出になる日がくるのだろうか  
悪魔に魅入られた想い出だ

## 7・大沢たかし 月夜に（後書き）

大沢少年の自制心 エライなあ・・・と（爆）  
書いてて思いました

感想・コメントなど頂けますと  
今後の励みになります よろしくお願い致します

## 8・私・そして卒業

### 8・私・そして卒業

修学旅行から戻って2日目に 私は大沢少年と二人で話をした  
放課後 宏が部活の最期の引継ぎがあると教室を出て行った後  
私は大沢少年に呼び止められ そのまま人気のない理科準備室へと  
いざなわれ 周囲に人影のない事を確認し  
さらに 声をひそめた大沢少年から「秘密」の続きを告白された

自分の胸の内だけに留めてはおけない程に  
大沢少年の中で宏の存在は更に大きくなり 苦しくてならないのだ  
という

そして 私の画策のおかげで勝ち得た 三泊四日の「同室」は  
苦行以外の何物でもなかったと  
これは少し抗議めいた口調で打ち明けられた

私には正直あまりぴんと来ない話であり  
よかれと思ってした事に 非難めいた言葉を向けられたのがやや  
納得のいかない程だった

大沢少年は私に神妙な顔で訴えた  
自分は寺山宏を一人の親しい友人としての存在以外に  
たまらなく性欲を刺激される対象として見てしまう事が止められない  
こんな自分は異常なのではないだろうか  
可愛らしい女生徒よりも誰よりも

寺山宏が可愛く思えてならず またその思いは募るばかりなのだと

私はしばらく考えたのち ごくごく当たり前の返答をした

好きになつてしまう事に理由などないのだと思う  
相手が異性であろうと同性であろうと

この際 大きな問題ではないのではないか

もちろん マイノリティーで在ることは否めないが

本人が覚悟を持って望むなら

恋に正解も不正解もないのではないか

そのような事を言つたと思う

大沢少年はほつと小さなため息をついたのち

私と友人になれて本当によかつたとつぶやいた

異性である私とこそ友情を育み

同性の宏につらい恋心を抱いてしまったこの少年に

私はいくばくかの同情めいた思いも感じていた

その一方で

私ははてしない好奇心にそそのかされていた

このまま この二人が想い合う日がやってくるのかどうか

その日以来

私はあらためて 18年間近くあつた幼馴染みを観察し直してみた

寺山宏 性別 男 年齢 18歳

身長 180センチ 体重 60キロ

一見 華奢な程細く見えるが 実のところ意外にもしっかりとした

美しい筋肉に覆われたバランスの良い体格をしている

小さな顔に細く長い首 そして長い手足でスタイルが良い

水泳が得意だ

それは優雅な美しいフォームで泳ぐ

顔立ちは どこか古風な美人女優を思わせるような

長い睫に縁取られた大きな瞳が印象的な美形である

少しぼつてりと厚い唇が ほのかな色香を匂わせる

女生徒たちは宏の事を　少女漫画から抜け出してきたようだと言う  
優しい性格が表れる静かに穏やかな笑顔は  
くつきりと深い笑窪を刻み　人懐こい雰囲気をも  
その一方で　ちらりと視線を移すその瞬間に  
たまらなく淫猥な艶めいた色気をふりまく事がある

案外　女生徒たちのみならず　男子生徒の中にも大沢少年同様に  
宏の容姿とその垂れ流しのフェロモンに陥落している者がいるのか  
もしれない

そんな事に思い至った

幼馴染みであり　あまりにも近くにすぎたせいで  
気づかずにきた宏のあまりにも無防備に垂れ流されている色気に  
今更ながらに目が覚めた思いがした

大沢少年が　宏と枕を並べて安眠できなかった理由が  
ようやく私にも少し理解できてきた

宏本人には何の意識も意図もなく  
ただただ天然と思われる屈託のなさで周囲を戸惑わせる  
大沢少年の嘆いた　悪魔的だの魔性だのといった言葉たちが  
ようやく私にも少し理解できてきた

ようやく

そう　すべてがようやく

それでも　まだまだ　私には他人事であり  
好奇心と興味のある対象でしかなかった

大沢少年と寺山宏

どちらが最初の一步を踏み出すのだろうか  
それとも　どちらかが先に逃げ出すのだろうか

私は ただ その結末が知りたいと強烈に思っていた  
残された日々は多くはなく

桜はあつというまに散り

受験対策クラス編成になった3年の新学期

私たちはそれぞれ別々のクラスになっていた

私は 二人と過ごす時間が少なくなっていた

それでも 放課後にはともに図書館へとむかい

それぞれの参考書と格闘して過ごしたりした

時折 大沢少年に その後何か進展はあったのかと

小声で尋ねても

その都度 彼の哀しげに首を横にふる仕草が痛々しかった

宏に

私が宏に「大沢君の事 どう思っているの?」と

そう切り出せばよいのだろうか?

「あんたはその気はないの?」とせつつけばよいのだろうか?

そんな私の素朴な思いつきに

大沢少年は激しく動揺した様子できつい調子で応えた

どうか そんな事だけはしてくれな と

いつかきつと 自分できちんと決着をつけてみせるから

そう言つて 大沢少年は静かに微笑んで見せた

いつしか 私のスケッチブックには

習作と題された 宏と大沢少年のデッサンばかりが溜まっていった  
卒業 という別れの季節が迫っていた

## 9・大沢たかし - 卒業

### 9・卒業 - 大沢たかし

彼女に励まされた 恋に正解はない と  
俺の恋も 成就を夢見て何も悪い事などない と

同性に恋をする それは確かに普通の恋路とは異なり  
明らかにマイノリティーとしてのイバラの道がまっている  
それでも 今 俺は宏という存在以外を  
心の中に描く事ができない

それぞれの進路が定まった時 それは卒業という別れの時の  
訪れを意味していた

彼女は希望通りのデザイン科のある短大へと入学を決めた  
宏は入院中の母親を気遣ってか

当初希望していた授業料の高い私大を諦め  
横浜郊外にある国立大の建築学科に合格した

俺は医学部の不合格をうけ 急遽2次募集の法学部を受験し  
某国立大学に入学を決めた

そして迎えた卒業式

穏やかに広がる青い空に 桜の花が散る

同級生や後輩たちに取り囲まれて

学ランのボタンをねこそぎもぎ取られた

見回せば 宏もまた同様に女子たちの黒だかりの中で  
困惑したような笑顔でこちらを見ていた

逃げよう



そう目で訴えた

このままでは中に着たワイシャツのボタンまで引きちぎられそうな気配にさすがに恐怖を感じていた宏もまた同様であったのだろう

俺の目線に頷くと 周囲の女生徒を気遣いながらも人垣を掻き分けて逃げ出した

二人 かなりの速さで走って校舎の裏手へと逃げ込んださすがにもう誰も後を追ってはこなかった

はあはあと息をきらした宏が桜の木に手をついた

花びらがはらはらと宏の上にも舞い散った

桜の精のようだと思った

抱き締めたい ふとこみ上げてくる衝動に身震いした

お互いの手に握られている卒業証書の筒だけが

今日が本当に最期の日なのだと俺に訴えている

変わらず いつまでも続いてゆくと信じて疑わなかった日々も

こうして何かしらの終止符はうたれてゆく

友情が終わるわけじゃない

一生の別れなわけじゃない

二度と会えなくなるワケでもなし

それでも

今日を逃したら

一生 そのチャンスは巡ってこないような

そんな思いに取り憑かれていた

俺は 宏の手をとり引き寄せた

拒まれれば そのまま玉砕してもいいと思った

重ねた唇は柔らかく 甘かった

どういうつもりだと俺を睨んだ宏の瞳が潤んでいた

その瞳には 必死の形相の俺が映りこんでいた

離したくないのだ

このまま抱き締めたまま連れ去りたいのだ

誰にも渡したくない

今ここで俺だけのものにしたい

そんな必死の思いが俺の瞳に熱い怪しい炎を灯していた

「はなして・・・離せよ 大沢っ！」

「イヤだ」

「何のつもりなんだ・・・一体・・・」

「お前が好きだ」

「なっ・・・」

「お前がずっと好きだった 寺山の・・・宏の事だけを見つめて  
高校の3年間を過ごしてきた 宏の事が・・・好きなんだ」

「お・・・大沢・・・」

宏の身体から抗う力が抜けた

一層強く抱き締めたら 俺の腕の中で小さなため息が零れた

「・・・大沢・・・」

小さくつぶやく彼の唇を再び奪った

宏のくつたりと力の抜けた身体を抱き締めて

深い口づけに夢中になった

抱き締めた胸元が熱かった

ボタンを全て失った学ランは前立てがはだけ

下に着たシャツの薄い生地越しに宏の胸のささやかな突起が見える

思わず 指先でその小さな尖りに触れた

宏の身体がびくりと震え 重ねた唇が小さく喘いで開かれた

「やつ・・・やめつ・・・お大沢・・・いやだ・・・」

言葉とは裏腹に 崩れ落ちそうに俺にしがみついてくる宏が愛おしかった

抱き止めて桜の樹に宏の背を押し当てた

そのままその白い首筋に唇を這わせ

シャツのボタンを外していった

露わになった胸元に可憐な花の蕾のようにつつすらと紅く色づいた胸の突起が震えていた

口づけて 舌で転がすように弄ぶと宏の口から甘い吐息が漏れた

もう止められない

身体を起こし 宏を抱き締め直すとその耳元に囁いた

「抱かせて・・・」

## 10・寺山宏・最初の一步

10・最初の一步　・　寺山宏

何が起こっているのかさっぱり判らなかった  
目の前に　見慣れたハズの

しかし　見知らぬ男の顔があつた

その瞳は焼き殺されてしまうかと思うほど熱く  
魅入られて　身動きひとつできなくなる

こんな男　知らない　いつもの奴じゃない・・・

爪がどうか・・・言われて・・・

手をとられて抱き寄せられて

何が何だか判らず　ふざけているのだばかり思っていた  
だから

居心地の悪い　いつもと違う熱い眼差しに

戸惑って　胸の鼓動が高鳴ってしまう

気づかれたくなくて　誤魔化したくて

ただ笑ってみせるしかなかった

その真剣な顔が迫ってくるのを避けられなかった

鼻先が触れそうになつて思わず目を閉じかけた

なんだこれ・・・

必死の思いでもがいたのに

身体には力が入らない

抱き締められて　背中に回された奴の手が熱い  
いや

身体中が熱い　熱い

重ねられた唇から全身の力が吸い取られてゆくみたいだ  
親友

そう思っていた男の唇は 熱く 熱く 蕩けるように甘い口づけ  
はだけられた胸元にその指先が這って  
ぞわりと全身にたまらない震えが走る

何なんだ

何なんだ一体

どういうつもりで・・・こんな

混乱する思考

そのまま白く靄がかかってゆく

その存在すら忘れていた胸のささやかな突起を摘まれて  
がくりと足のちからが抜ける

崩れ落ちそうな身体を抱き止められて

桜の樹に押しつけられて

首筋に吐息がかかる

もう

何も考えられない

耳に聞こえた言葉の意味すら考えられない

「抱かせて」

それは

どういうこと？

ここにいる男は俺の親友だろ？

高校3年間をともに過ごしてきた親友だろ？

いつも俺の傍らにいて

いつも穏やかな笑顔で

いつも面白おかしくふざけ合って

側にいるのがいつしか当たり前になっていた

そんな存在

今 目の前にいる男は誰だ？

俺の事を好きだという

ずっと俺だけを見つめてきたという

そして

俺を抱き締めて唇を重ねる

甘い口づけに縫い止められたように動けなくなる

今 思い出した

俺のファーストキスだ・・・

どうしてくれるんだ

大沢

どうしてくれるんだ

俺を

どうしたいっていうんだ

このまま

言われるままに身を任せたら

何が起こる？

## 10・寺山宏・最初の一步（後書き）

コメント・感想など 頂けますと  
今後の励みになります  
よろしくお願い致します

## 11・恋が許す範囲

### 11・恋が許す範囲

「抱かせて・・・寺山・・・」

「なっ・・・何言ってるんだ大沢」

「お前の全てを俺にくれよ」

「んっ・・・やっ・・・やめろって・・・人が来たら・・・」

「人の来ない所にいこ？」

「そうじゃなくて・・・」

桜の花びらが舞い散る中

樹の幹にその背を預けたまま

大沢の繰り返し返される口づけと 胸元への執拗な愛撫を受け

宏の思考は徐々に鈍り 白い靄の向こうへと歩み出していた

それでも 最期の気力を振り絞って大沢の手をふりほどこうと

小さく身をよじってみる

それでもその身体は解放される事なく

かえって強く 大沢の広い胸に抱き込まれてしまう

そして耳元で繰り返し囁かれる甘い言葉に

意識が遠のき始める

胸元に芽生えた小さな疼くような快感が

静かに宏の全身の血を下腹部へと集めてくる

「もっ・・・やめ・・・やめて大沢・・・俺 おかしくなる・・・」

「おかしくなれ」

「何言ってるんだ さつきから お前 へん」

「変なんじゃない 正直になっただけだ」



「余計判らないよ・・・頼むから離して・・・」

「離れたら二度と戻ってこない」

「何いつて・・・」

「逃げないでくれ 宏」

「大沢・・・」

繰り返される告白は宏の耳朵をくすぐり

その吐息がかかる度に身体の震えが大きくなっていく  
ずるずると足元から崩れ落ちそうになる

「と・・・とにかく 人が来たら・・・ここ学校・・・」

「もう卒業した」

「そういつても まだこんな・・・大沢っ!!」

「帰ろう」

「ちよっ・・・大沢」

大沢は宏の腕を掴むと 乱れたシャツも学ランもそのままに  
宏の肩を抱くようにして裏門へとむかつて歩き始めた  
強引に与えられた刺激と数え切れない程の口づけに  
宏の目元は紅色に染まり その足取りはあやうかった  
そんな宏を半ば抱えるようにして大沢は歩く

「は・・・離せよ 大沢 一人で歩けるっ!」

「離れたら逃げるだろ お前」

「あ・・・当たり前だ 離せっ!」

「いやだ」

「何なんだよお!ホントに 怒るぞ」

「怒った顔もいい」

「・・・!!」

どうやらふざけているのではないらしい様子が  
ようやく宏にも何か伝わってきて

大沢の厳しい横顔に 宏は思わず口をつぐんだ

そのまま

大沢にひきづられるようにして 宏は学校を後にした  
ふと 頭の片隅を幼馴染みの少女の顔がよぎった

いつも 3人でいたよなあ・・・ぼんやりと  
そんなことを思った

そして 今更に いくつかの出来事が思い出され  
その全てが彼女の画策によるものだったのだろうと  
なぜかすっきりと納得がいく気分になった

彼女は大沢の気持ちを知っていたに違いない

自分にはなく 俺に 寺山宏という男に向かっていた大沢の心  
彼女はそれを知って 俺と大沢の間にいつもいたのだ  
恋のキューピットにでもなったつもりだったのか？

大沢の俺への想いを成就させようと思っていたのか？  
男同士だぞ 一体何を考えてるんだ  
そもそもなんで俺なんだ？

大沢の気持ちが今ひとつ判らない

ざわざわと心が次々と疑問符の台詞を吐き出しては震える  
俺

そういえば 恋 したことがなかったなあ・・・この3年間  
大沢と幼馴染みと俺の3人

それが揃っていれば他には何もいらなかった  
そのどちらかを失う事も  
考えた事もなかった

今 俺は大沢を失おうとしているのか？

俺の拒絶の理由は？

男だから？

本当にそうなのか？

俺は 大沢にどんな感情を持っていた？

親友だ かけがえのない友人だ

だから 大沢に恋人が出来ても 他の誰かの隣で微笑んでも  
それは俺にとっても嬉しいこと

嬉しいこと

嬉しいこと？

嬉しい事のハズじゃないか？

なぜ俺の心は乱れる？

大沢の隣で微笑む誰かを想像した時に こんなにも胸が痛むのは  
どうしてなんだ？

独占欲

すぎた友情

子供じみた嫉妬心

求められて 心のどこかで首を縦にふる自分がいる事に驚いた  
やめてくれ はなしてくれ どういうつもりだ

口から零れる言葉達が 心の叫びとは食い違っているように思える  
大沢の手のぬくもりが心地よくて

重ねられる唇に夢中になった

胸元をさぐられて たまらない愉悦が全身を駆けた

正直になっただけ

大沢はそう言った

それでは 俺の正直な心は何と言っている？  
耳をすませてみよう

自分の心の声に

怖い

正直になる事がこんなにも怖いことだとは知らなかった

この恐怖をねじこんで 大沢は俺を抱き締めたのか

抱き締められて 俺の心の中のホントが目覚まそうとしている

ホントは

ホントは

ホントは

俺は 恋が許す範囲にとどまっていられない

肩を抱かれ 裏門をでた

「大沢・・・俺の・・・俺のうち」

「お前んち」

「行こう」

俺は 大沢の熱にやかれてみたいと強烈に思った  
ばかな・・・

何かが かわろうとしていた

二人の間で

俺の中で

## 12・結ばれて 気づくこと

### 12・結ばれて 気づくこと

どうやって たどり着いたのか覚えていない

気がついた時には 大沢に即されて部屋の鍵を開けていた  
母が入院してから一人で暮らす部屋は学校からほど近く

入居者のほとんどが独身者の一人住まい

ワンルームの集合住宅

良く言えばマンション ひらたくいって普通のアパートだ

狭い玄関にもつれ合うようにして転がり込み

大沢が後ろ手に扉をしめて鍵をかけるのを気配で知った

それ程に 意識は朦朧としていた

気がつけば 広くもない部屋の中 そのほとんどのスペースを

占めているベッドの上に 重なり合うように倒れ込んでいた

貪るように唇を奪われ 口づけが深くなる

大沢の舌が口腔に忍び込んできた

目眩がする

「宏……」

大沢の吐息に混ざる囁きが耳朶をくすぐる

名前を呼ばれて首筋に甘い痺れが走った

「宏……」

うかされたように名前を繰り返す大沢の手がするりとシャツの中に

忍び込み 自分では決して触れる事のない

その存在すら忘れていたような尖りに指が這う

ぞくりと背中が反り返ってしまう

それは軽く爪でかかれただけで その存在を主張する

むず痒いような愉悦がわき起こってくる

「宏・・・ひろし・・・」

気づけば シャツのボタンは全て外され  
ひんやりとした空気が胸元に流れ込む

しかし 甘い痺れに似た熱い感触が胸の尖りを包む

大沢の舌がそれを転がし押しつぶすように弄び

軽く歯をたてられて思わず小さな悲鳴が口をつく

「ひゃっ・・・あっ・・・」

自分の声とは思えない程に甘く爛れた音が漏れる

ただ 人目を避けたかっただけ

校舎の裏とはいえ いつ誰がやってくるかも判らないような

桜吹雪の中から逃れたかっただけ

だから家に帰りたいと訴えただけ

こんな事を望んだわけじゃない

俺は

ホントに？

もっと

もっとと 大沢の唇と肉体に欲望を覚えたのではなかったか？

自分の中に芽生えているやり場のない

たぎり わき起こる感情が判らない

覆い被さるように抱きすくめられた身体が熱い

大沢の身体の熱がたまらない

自分と同じ構造の身体が熱く昂ぶって押しつけられている

その固くしこった熱が 自分にも備わっている事を感じる

擦り合わせるように腰が揺れてしまつのを止められない

自分の身体が意志を裏切っていく

思考が追いつかない  
怖い

恐いのに 大沢の手をふりほどけない  
その唇から逃れられない

口づけを せがむようにすがりついてしまう  
気づけば 下着ごとズボンを引き下ろされ

自分が恐ろしく感じて昂ぶっていた事を知らされる  
大沢の大きな手に包まれてそれは甘い蜜を滲ませる  
もどかしそうに自らもズボンの前をくつろげて

解放された大沢の昂ぶりがキスするように俺のそれに触れ合わされる  
「あっ……」

瞬間 頭の中に白いスパークが飛んだ

大沢の手が二人の昂ぶりを一掴みに重ねて  
ゆっくりと擦りあげる

その動きに腰が耐えきれずイヤらしく揺れるのが自分でも判る

「おっ大沢あ……んっ……」

「宏……ひろし……このまま もすこしだけ……」

「や……やだ……大沢 やだ もう 離して……」

自分のものなのか

大沢のものなのか

判らない激しい脈打つ響きが脳髄を直撃する

甘い陶酔感に襲われて

かろうじて繋ぎ止めていた意識を手放した

大沢の手の中に 熱い飛沫を放っていた

## 12・結ばれて 気づくこと（後書き）

コメント・感想など頂けますと今後の励みになります  
よろしく願いいたしますー



### 13・ダ・カーポ そして フィーネまで

13・ダ・カーポ そして フィーネまで

「宏・・・ひろし・・・」

「はなせっ 離せ大沢っ！もういいだろうッ！離してくれっ！」  
「・・・ひろし・・・」

宏は大沢の胸を押し戻すように腕をつっぱった

抱き締められた腕の中から逃れようと身をよじる宏を

大沢は逃すまいとするように より深く抱き込もうとする  
見上げて睨み付けようとする宏の瞳は潤み

目の周りがほんのりと上気したように紅色に染まっている

「離せ・・・」

「いやだ」

「もう気が済んだだろうっ！離れろっ！」

「いやだ」

「何だって言うんだっ！こんな・・・こんな」

「お前が欲しい」

「落ち着け・・・大沢・・・な？」

「俺は冷静だ」

「おかしいだろ？こんなこと・・・普通じゃない！」

「恋愛に普通も何もないだろう」

「俺は男だぞ？」

「好きなものは好きで何が悪い・・・」

「・・・っつ・・・」

大沢のたじろぐことのない真っ直ぐな視線に

宏は言葉を失った  
迷いのない大沢の言葉は宏の胸に刺さる

「どうしてそんなに・・・何の躊躇もなく言い切れるんだ」

「この3年間で出した答えだ」

「俺には何の猶予もないのか？」

「俺を好きになってくれ」

「好きだよ 親友だろ」

「親友以上にしてくれ」

「どういう事なのか 俺には判らない」

「身体を繋ぎたい お前の全てを欲しいと思う」

「・・・応えられない」

「・・・・・・」

「応えられないよ さっきの事だって・・・どう理解していいのか  
俺は頭がおかしくなりそうだっ!!」

「俺の手でイッタ ただ それだけだ」

ばしっ

宏の平手が大沢の頬を打った

「即物的だな 大沢・・・男の身体の構造上仕方ない結果だ！  
気持ちや心がそうさせたワケじゃないっ!!」

「俺は宏の心も欲しいと思っている」

「俺はお前を親友以上の何者とも思わないっ！」

「・・・・・・」

「帰ってくれ」

「考えておいてくれ・・・今日は すまなかった

俺も急ぎすぎた・・・まずは気持ちを伝えるべきだった」

「気持ち？」

「宏を好きな気持ちは本当だ 信じて欲しい」

「・・・気の迷いだ・・・」

「本気だ」

「大沢・・・女を見る もっと もっと周りを見る

お前の事を好きだという女子は山程いたじゃないか」

「お前が・・・宏が好きだ」

「気の迷いだと・・・思う・・・」

「・・・」

「時間を・・・時間をくれないか・・・」

「わかった」

大沢は ゆっくりと立ち上がり 脱ぎ捨ててあつた服を身につけた

「俺は本気だから・・・」

そう言い残して大沢は宏の部屋から出て行った

この日を境に

大沢が宏の前に現れる事はなかった

新生活の4月

大学生活を始めるにあたって 宏は引越しをした

大学にほど近いアパートを借り キャンパスへはバイクで通った

母の病院にも近くなり 見舞いに訪れるのも楽になった

新しい友達もでき 宏は大沢の事を忘れた

いや

忘れようと心がけていた

つとめて考えないように毎日を過ごした

それでも ふと部屋で一人になった時などに

どうしてもあの日の事が蘇った

携帯も変えた

新しい住所は誰にも知らせなかった

携帯は鳴らない

ただ いつも耳に響く声があった

「宏・・・俺は本気だから・・・」

## 14・私―新生活にて

### 14・私―新生活にて

私は相変わらず実家で暮らしながら短大へ通い始めた  
一人暮らしも考えたが 経済的な事もあり諦めた

そんな中 宏が引越したのを知った  
何も知らされていなかった

母がたまたま 小さな軽トラック一台で出て行くとしていた  
宏に出くわし 転居を知ったのだった

宏は私たち家族にも行き先を教えないつもりだったらしい  
しかし 入院中の母の事もあるではないかと

私の母に説得され 宏はしぶしぶ転居先と連絡先を書き残したそうだ

短大から戻ってその話を聞いたとき

私は大いに驚き 少なからずショックを受けていた

今まで どんな小さな事でも隠さず話してきた仲であり  
またこれからも ずっとそうでありつづけるものと思いこんでいた  
のだ

幼馴染み そんな響きは離れ離れになって初めて切なく  
胸に留まる言葉なのかも知れない

宏のいない生活に 私は随分と戸惑い悩みもした

しかし 7月の夏休みを迎える頃には新しい友人もでき  
それなりに毎日を過ごす事ができるようになっていた

そして夏のある日

友人と立ち寄ったコンビニで 何気なく手にとったファッション誌に  
私の目は釘付けになった

「優勝者はモデルデビュー」とうたわれた美少年コンテストらしい  
頁に

見紛う事のない姿があった

宏だった

大きなトロフィーを抱え はにかんだ笑顔で立つ宏の写真を

私はしばらくの間絶句して凝視していた

そんな私に気づいた友人は陽気に言った

「ああ！寺山ヒロシ君優勝したんだねえ！やっぱりね

私も彼に投票したもん！格好いいよね っていうか

可愛くて ちょっとエロイ感じがいいんだよねえ」

「・・・・・・・・エロイ・・・・・・・・」

私はしばらく 正常な思考回路へと立ち戻る事が出来なかった

その後数ヶ月という短い期間のうちに

宏は男性誌・女性誌問わず あちこちでその姿をみかける程の

人気モデルへとなっていた

表紙を飾る事も少なくな 街中にはそのポスターさえしばしば見  
かけられた

風の便りによれば というのも芸能通の友人からの情報によれば

寺山ヒロシこと 宏は某国立大学建築学部の現役大学生であり

学業の傍らモデルとして生計をたてているらしい との事であった

友人は私が宏の知り合いで在ることは知らない

屈託もなく 「格好良くて ちょっと影があるようなエロさが好き」  
という

こんなに人気が出てしまった有名人に 今更連絡をとるのは  
どこかはばかられた

初めてモデルとしての宏を知ったあの日に  
久しぶり　とメールのひとつでも送っていれば  
高校時代の続きがまた出来たかも知れない  
そんな後悔にも似た思いがよぎる

卒業して本当にバラバラになってしまった私たち  
離れてみて初めて　いかに自分が宏に依存して生きてきたのかを痛  
感した

幼馴染み　もうそんな言葉では宏を繋ぎ止めておくことは出来ない  
のだ

漠然としたそんな思いに　我ながらその喪失感の大きさに驚いた

そしてふと　大沢少年の事を思い出した

彼はその後　どうしているのだろうか

卒業式の後　私は二人の姿を捜して校舎の中を走り回った

しかし　二人を見つける事はできず

私とはとぼと一人で学校を後にしたのだった

それから宏にも大沢少年にも会っていない

二人は　あの後どうしているのだろうか？まだ交流があるのだろうか

私は思い立って大沢少年の携帯にメールをいれた

久しぶりです　その後どうしてますか

短い文面に私は自分のアルバイト先である画廊の住所を記した

数日の後

大沢が私のバイト先である画廊を訪れた

大学は夏休みであり　今年も随分と暑い夏となっていた

カラン　と入り口についた小さな呼び鈴が鳴り

背の高い影がうつそりと画廊に入ってきた

飾り気のないＴシャツにコottonのサマーパンツという出で立ちは一見地味のようであり実際には大沢の持つ鋭くどこか野性的な雰囲気を実に際だたせており とてもよく似合っていた

「久しぶり」 そう言つて静かに微笑んだ大沢は

高校時代とはどこか少し違つて見えた

何がそうさせているのか私には判らなかつたが

私の知っている大沢はもつと朗らかな柔らかい笑顔の少年だった今の大沢の笑顔は大人っぽくなった という一言で片付けるにはどこかひっかかる 何かが違う 陰を帯びていた

「最近 宏に会つてる？」 私の問いに大沢は首を横に振つた

雑誌の事は大沢も本屋で見かけたといい 宏がモデルとして活躍し始めている事を知っていた

また ああいった華々しい世界に宏はそぐわない気がする  
と 少し心配しているような口調で言つた

「宏には会っていないが 宏のお母さんのお見舞いには時々行つて  
いる」

大沢は宏の母を見舞い いつか宏にも出くわす事があるかもしれないと秘かに願っているのだと 面はゆそうに言つた  
その表情は どこか苦しげにも見えた

大沢はまた 卒業式のあの日 宏から「女と付き合いえ」と言われたと私にぼそりぼそりと語つた

「それで・・・大沢君 お付き合いしてみたの？」

私の問いかけに頷いて応えた

「コンパで知り合った女性が連絡してくれと言つのでしばらくお付き合いをしてみた」

性的な関係にも至つたのだとかわからぬ口調で言つた



けれども それは自分にとって 動物の雄としての機能が正常に働く  
と言うことの証明にしかならなかった とも言った

女性は可愛らしく 美しく 見ているのは楽しい  
手をつなげばあたたかいその手に癒されるし  
抱き締めれば柔らかいその感触に心地よいとも感じた  
しかし どうにも恋する気持ちになれないのだという

かといって

自分は本当に男にしか興味を持ってない 真性のゲイなのかと不安に  
もなり

そのてのやからが集うであろう店に出向いてもみた  
そこで 数人の男に声をかけられもしたが

これは全くと言って何も感じるところもなく

正直なところ そういった関係を求める輩とただ会話をする事すら  
苦痛以外の何物でもなかったという

結局の所

大沢は私の目をしっかりと見つめて呟いた

結局の所 やはり自分は寺山宏という人間だからこそ

恋しくもあり 愛しくもあり くるおしく求めて病まないのだと気  
づいた と

いつか

いつか宏と再会した時に その傍らに可愛い女性が佇んでいたら  
どうするの？ そんな意地の悪い質問を試してみた

大沢は しばらく俯いて足元を見つめていたが

顔をあげると きつぱりとした口調で応えた

「それでも気持ちは変わらないと思う」 と

## 15・寺山宏一知らない世界で

15・寺山宏一 - 知らない世界で

大学に入ってしばらくした頃　ガールフレンドができた  
好きです　つきあってください

そんなストレートな告白をされて　宏は彼女を受け入れた

綺麗なロングヘアに黒く大きな瞳がクリクリと動く

どこか小動物のような可愛らしい少女だった

何も考えず　軽い気持ちでOKしていた

一緒に買い物をしたり　映画を見たり

食事をしたり　大学内でも一緒に勉強をしたりもした

ただ　キスもセックスもしなかった

そついう欲求が不思議とおこらないのだった

ガールフレンドは宏の外見をいつも褒め　大好きだと言った

自分の外側だけが好かれているのだろぅと感じていた

宏は自分が女生徒たちから人気があるのに反して

陰で男子生徒たちから良く思われていない事も感じていた

高校時代には向けられた事のない視線がつらかった

今更のように　幼馴染みと大沢と共にいた日々が懐かしく思えた

守られていたのかな　とも思えた

ガールフレンドは宏の写真に履歴書を添えて

某雑誌でのオーディションに応募してしまった

話がとんとに進み　気がつけばモデルという仕事を始めていた

自分の存在が初めてプロのカメラマンによって切り取られ  
その姿が雑誌の誌面を飾った時

宏は不思議な思いに取り憑かれていた

意識した事もなかった自分という生き物の外見が

こんなふうに人の目には映っているのかと愕然とした

ポーズを決める事も 自分で表情を作る事もできない

素人の自分が ただそこに突っ立っているだけの自分が

こんな風にカメラマンの目には映っていたのか

これを見る人達にとって 寺山ヒロシ という存在は

この写真が全てなのか

空恐ろしい気すらした

しかし 病床の母に雑誌を見せたら とても喜んだ

その笑顔が嬉しくて 次の仕事も引き受けた

そうこうするうちに なぜかひっぱりだこの人気モデルの仲間入り  
をしていた

自分に自信はない その外見に拘りもなんの自覚もなかった

それなのに 周囲の人間たちはこぞって自分の外側を褒める

複雑な気分だった

ガールフレンドの態度も変わった

それまでの可愛らしい少女から 嫉妬深く疑い深い少女へと変貌した

結局 夏休みの終わりには別れが訪れていた

残ったのは 彼女がきっかけを作ってくれたモデルの仕事だけだった

離婚した父からの養育費や生活費は宏が大学に入学すると同時に途  
絶えていた

もう成人したものと見なされたのか 先方にも経済的な理由がある  
のか

母も宏も何も知らされる事はなかった

宏は 学費と生活保護だけではまかないきれないものを補うためにモデルの仕事をやめるワケにはいかなかった

正直 普通のアルバイトや肉体労働のバイトをした方がもっと

稼ぎはよかったかもしれない それでも 宏にも何某の責任感が芽生えており

現場で必要とされればモデルとしてできうる限りの事をしたいと思うようになっていた

その日も 雑誌のグラビアの撮影にかり出されていた

本当は同じ事務所に所属する宏よりも年長のモデルが参加するハズだったが

どういうワケかクライアントとカメラマンの強い希望により

宏へとモデルが変更されていた

カメラマンは今 実力と人気ともに若手の頂点にたつ吉田という男だった

吉田は自らも俳優あがりという異端の経歴を持つカメラマンでありその精悍で端正なマスクでビジュアル的にも注目を集めている存在であった

指定された撮影場所へと向かった宏はそこがいつもの現場とは少し趣の違う場所である事にささやかな疑問を覚えた

それは 都内の高層マンションの一室であり

宏の他にモデルは一人もやってきていなかった

室内にはカメラマンが一人で待ちかまえていた

「おはようございます 寺山ヒロシです よろしくお願いします」

そういつて頭を下げて部屋に入った宏をカメラマンが笑顔で迎えた

「やあ ヒロシ君 初めまして 僕は今日撮影をさせてもらう吉田です」

「よろしくお願いします」

あらためて頭をさげた宏ひカメラマンの吉田はソファアをすすめた

「あの・・・メイクさんとか衣装さんたちスタッフのみなさんは・・・どちらに？」

宏の問いかけに 吉田はカメラの三脚をセットしながら答えた

「ああ・・・今日はね 僕が一人でさせてもらう事になってるんだ」

「・・・お・・・お一人ですか？」

「ああ そう 僕一人で全部するから心配しないで」

「は・・・はい」

宏は落ち着かない気分でソファアに腰をおろした

高い天井いっぱいまでの大きなガラス窓の外には都心の大パノラマが広がっている

天気の良い空が青く目の前に迫っていた

空中に ぽかりと浮いて取り残されたような気分になる

ぼんやりと窓の外を眺めていた宏の肩に吉田の手がかかった

「宏君 撮影の前にジューズでもどう？」

そういつて吉田は宏にグラスに注がれたオレンジ色の液体を勧めた

「あ・・・ありがとうございます 頂きます」

宏はグラスを受け取ると 緊張で乾ききっていた喉に一気に流し込んだ

「くつくつく・・・美味しい？宏君」

吉田の顔が宏の目の前に迫った

「・・・？なっ・・・なんですか？よ・・・吉田さん？」

「ちよつとだけ 時間がかかるっていつてたっけ くつくつく（笑）」

「な・・・？なんの時間・・・です・・・か・・・うつ・・・」

宏は自分の身体からがっくりと力が抜け落ちてゆくのを感じた

たまらない恐怖に襲われた

ソファ―に座っていらなくなり 足元の毛足の長い絨毯に崩れ落ちた

「な．．．な．．．にを．．．俺に．．．の．．．飲ませ．．．たっ！！」

「宏君 甘いなあ 君．．．この世界のお約束 知らないの？」

「くっ．．．くそっ．．．な．．．何が やく．．．そく．．．」

「大体 撮影なのに二人つきりなんておかしいと思わなくちゃ

この先 気をつけなくちゃだめだよ 君みたいな美人はいつも危険と隣り合わせなんだから ちゃんと自覚を持ってやって行かなくちゃ

くっくっく（笑）」

「く．．．くそっ．．．」

吉田の手が宏の細い首筋にのびる

逃れようと身をよじるが身体が言うことをきかない

助けて．．．助けて．．．誰か．．．

自分の身に何が起こきようとしているのか 漠然とした恐怖で思考が止まる

必死な宏の姿を吉田は楽しむように目を細めた

「キレイだね．．．寺山君．．．君の一番綺麗な姿を写真に撮ってあげるからね」

吉田の手が宏の上着のボタンをひとつずつ外し始めた

## 16・寺山宏―受難

### 16・寺山ヒロシ―受難

朦朧とした意識の中 宏は自分が吉田に担ぎ上げられてどこかへ運ばれてゆくを感じていた

先ほどまでいた明るいい光に満たされたリビングとは違う厚いカーテンで閉ざされた薄暗い部屋

部屋にはキングサイズのベッドがひとつ

どさりと宏はそのベッドの中央へと投げ込むようにして下ろされた

「本当に綺麗な顔をしてるね・・・ヒロシ君 顔だけじゃない

整った体格に・・・きれいな筋肉がちゃんとついていて・・・肩から二の腕のラインがたまらなく魅力的だね」

「・・・や・・・やだ・・・やめ・・・」

宏は自由にならない手足で必死にベッドの上から逃れようともがいたそんな宏を楽しむように眺めていた吉田がゆっくりと

ベッドの上にあがると宏に覆い被さるように身体を重ねてきた

「桜色の唇・・・ふっくらとして ホントに素顔なの？信じられないな・・・」

吉田は指の腹で宏の柔らかい唇の輪郭をなぞる

吉田が着ていたシャツを脱ぎベッドの下へ落とす

30代後半のはずだが吉田の身体は見事にひきしまり

同性からみても惚れ惚れするような筋肉に覆われた裸体が露わになった

しかし この状況で目の当たりにしたそれは

宏にとって恐怖以外の何物でもなく

大きく見開いた宏の瞳にはうっすらと涙が滲んだ

「なっ・・・何を・・・しようっていうんだっ 俺に・・・」

「美人を拉致してする事といったら決まってるだろ? (笑)」

「おっ・・・俺は男だしっ」

「美人は男も女も大好物なんだよ 僕はね」

「何言つて・・・っつ・・・か・・・身体が・・・」

「うん? そろそろ効いてきた?」

「何が・・・効くって・・・」

宏は喉がはりつくように声がかすれ 身体がひどく熱く汗ばんできた  
全身の血が沸点を迎えてしまったような かつかとした熱がたまら  
ない

そしてそれは宏の下腹部へと堪えきれない熱を誘ってゆく  
自身の意志に反して疼くような震えがおこる

吉田はその宏の反応を楽しむようにゆっくりと宏の衣服を剥がして  
ゆく

宏の抵抗は虚しく吉田の身体に押さえ込まれ

白く滑らかな肌が露わにされてゆく

吉田の唇が 苦しげに喘ぐ宏の唇を塞いだ

「んっ・・・」

顔をそむけようともがく宏の小さな顎を掴み

吉田の口づけは一層深くなる

息苦しさに思わず喘いだ瞬間に 宏の口腔に吉田の舌が滑り込む

絡め取られるように舌を弄ばれ息があがる

のけぞった白いのど仏に吉田は唇を這わせ

そのまま宏の首筋に淡い紅色の跡を残した

「っつ・・・」 軽く鋭い痛みに宏の眉間に皺が寄る

そんな表情が男の欲情を益々煽るとは宏に知る由もなく  
逃れたい一心で自由の効かない身体をよじり続けていた



しかし 吉田の唇が胸元へと移り

宏の胸の珊瑚色の突起を捕らえた時

宏の口から悲鳴に似た声が漏れた

全身が震える程の愉悦が宏を襲い 自身が熱く昂ぶるのを感じた

「・・・なっ・・・なんで・・・」

意志に反して吉田の愛撫にいやというほど感じてしまう自分が

信じられず また腹立たしく

おそらくはジューズに混ぜられていたであろう薬物の効果に背中が  
冷えた

恐かった

自分が自分でなくなってしまうそうで

吉田の手が身体中を這い回り 撫で回される程に口から漏れる

自分のものとは思えない甘い吐息がたまらなかった

「ヒロシ君・・・声がいいから・・・啼かせがいがあるね・・・  
色気にぞくぞくする」

吉田はヒロシの剥き出しの胸元から下腹部へと舌を這わせていった  
やんわりとその頭をもたげ始めていた宏のたかぶりを  
薄く柔らかい茂みの中から吉田は自らの掌へ包み込む  
ぴくりと宏の背中がはねる

抱き戻すようにその細い腰を抱え込むと

吉田は宏の昂ぶりをその口に含み 淫猥な音を響かせた

「ひゃあっ・・・あっあっ・・・」

薬物のために敏感になりすぎている箇所を執拗に責めあげられ  
宏は全身を震わせて啼いた

吉田の指先が宏のつつましくその入り口を閉ざした

蕾へと伸びると 宏の恐怖は頂点に達した

「やだっ・・・やめて・・・やめてくれ・・・いやだっ!!」

宏の懇願を鼻で笑い飛ばすと吉田はかまわず指先で蕾をこじ開けてゆく

「綺麗なピンク色だ・・・もしかして初めてなの？」

「あ・・・当たり前だっ！だれが・・・こんな・・・」

「君ほどの美人だったらもう誰かに食べられちゃってるかと思ってたよ

これは思いがけない収穫だなあ　大丈夫　優しくするよ　安心して」  
吉田はそう言つて　宏の蕾に口づけるとその舌先で入り口を解し始めた

「やあああつ・・・つつんっ・・・」

強すぎる刺激が宏の全身を襲い　悔しさと恐怖に涙が零れた

大沢・・・ふと自分がその名に助けを求めている事に宏は気づいた  
助けて・・・大沢・・・

首を左右にうちふり　乱れた前髪が宏の額に散つた

膝を割られ　内腿を大きく開いた形で押さえ込まれたまま

宏は吉田の愛撫から逃れようと必死にもがいていた  
しかし一方で　抗えない快感が宏を包み始めていた

こんなのイヤだ・・・力と薬で押さえ込まれるなんて

吉田への怒りというよりも

宏自身が自分を許せない怒りだった

こんな状況を招き入れてしまった自分の無防備さに腹がたつた  
怒りにまかせて渾身の力をこめて足を蹴り上げた

宏の膝と足先が続けざまに吉田の鼻がしらを強打した

「うつ・・・ぐっ・・・」

たまらずうずくまつた吉田をふらつく身体でベッドから突き落とした  
よろよると起き上がった宏はおぼつかない足取りでベッドの周りに  
散らばった

自分の衣類をかき集め　急いで身につけた

恐怖と薬のせいで　震える指先が思うように動かない

もどかしくシャツのボタンも全部はかけきれず かまわず上着を羽織った

「こ・・・このっ！新入りの世間知らずがっ！こんな事をしてただで済むと思うのかっ！！」

顔を覆いながら絶叫する吉田には目もくれず

宏は必死で部屋をでた

身体は自由がきかず 震える手でエレベーターのボタンを押す背後から今にも吉田が追って迫ってきそうで

恐怖に涙がとまらなかった

吉田は追ってはこなかった

プライドの高い吉田は惨めな姿で宏に追いつがる事をよしとしなかったらしい これは宏にとって幸いであった

宏はふらつく足でなんとか大通りまで出ると通りかかったタクシーに転がり込んだ

不思議そうに涙に濡れた宏の顔をみやる運転手に

宏は行き先を告げた

大沢に会いたい

ただひたすらに そう念じていた

## 16 寺山宏一受難（後書き）

ご感想・コメントなど頂戴できますと  
今後の励みになります よろしくお願い致しますう

## 17・大沢たかし ― 再会

17・大沢たかし - 再会

その頃 大沢は不思議な胸騒ぎを覚えていた  
何かざわざわと落ち着かない気分になり

一人大学のレポートに取り組んでいた部屋の窓から外を眺めていた  
大学入学と同時に入居した一人暮らしのマンションは  
狭いながらも快適に整えられ 好きで選んだ家具で揃えられていた  
居心地の良いはずの部屋の中で

何が落ち着かない原因なのか 首をかしげた時

大沢の携帯が鳴った

着信番号に見覚えはなかった しかし迫る胸騒ぎに

慌てて電話に出ると声がうわずった「て・寺山？ 宏か？」

大沢の声に 電話の向こうからはかすれた声がした

「お・大沢・助けて・俺・俺・どうしたら・」

「宏？ 宏？ 今どこにいるんだ？」

「おまえんちに行こうとしたのに・お前・いない・」

「一人暮らしをはじめたんだ 実家にはいない 俺の家に行ったのか？」

今はどこにいるんだ？そこを動くなよ すぐ行くからっ！」

大沢は携帯と財布 家の鍵だけを掴みポケットにねじ込むと  
部屋を飛び出した

行き先は実家の近くのコンビニ 宏が電話をかけてきた場所だ  
バイクを飛ばして10分程でたどりついたコンビニの  
駐車場の片隅に うずくまっている宏を見つけた

「宏っ！！」

「おおさわぁ・」

「何も言わなくていい・・・行こう 歩けるか？」

「うん・・・」

「バイクの後ろ 乗れるか？ほんの１０分 我慢できるか？」

「うん・・・」

おとなしく大沢に即されるままに宏はバイクの後部座席に跨った

「しっかりつかまってるよ」

「うん・・・」

宏にヘルメットを被せると 自分はノーヘルのままバイクを発進させた

大通りを避けて住宅街を抜けながら なるべく静かにバイクを走らせた

宏が弱っているらしいことはその姿を見つけた時に判った

ただ その理由は見当もつかなかった

しかし今はとにかく 大沢は宏を自分の部屋へと連れて帰りたいかった

何かに追い立てられるように

何かから必死に逃れるように

大沢はバイクを走らせた

その背中から両腕を深く大沢の腰にまわし ヘルメット越しにその顔を

大沢の背中にすりつけるようにしがみついた宏は目を閉じていた

目を閉じてバイクに揺られるのは恐い

しかし 宏は今 大沢の背中の中へぐもりに全ての神経を注いでいた  
そうしないと疼く身体がバイクから振り落とされそうで

また すぐそばに まだ吉田の荒い息づかいが聞こえるようで

宏はきつく目を閉じて 先ほどの全ての全てを脳裏から追い出そうと  
していた

大沢に抱き取られるようにしてバイクを降りた時

宏は繋ぎ止めていた意識を手放した

ふらりと気を失って大沢の胸に倒れ込んだ

「宏っ！！」

大沢は気を失った宏を抱き上げると 部屋へと運び入れた  
ヘルメットをとり 靴を脱がせ  
宏をベッドの上に横たえた

苦しいかとゆるめたシャツの襟元から 宏の白いうなじにくつきりと刻まれた

薄紅色の痣が見えた

「・・・・！！・・・・」

それが何を意味するのか 大沢は瞬時に理解した  
大きいため息をつく と 大沢は宏の肩口まで掛け布団を引き上げた  
冷たい濡れタオルを宏の額にのせてやり  
その手を握ったままベッドの傍らに座り込んで付き添った

長い睫が白い顔にくつきりと陰を落とし

閉じた瞼は泣きはらしたように紅く染まっている

何を堪えて噛み締めたのか 宏の唇の端が小さく切れて血が滲んでいた

何があつたのだろうか

どうして自分の所へ宏はやってきたのだろうか

助けて

確かに宏はそう言った

何から逃れてきたのだろうか

知りたいという激しい欲求のすぐ傍らで 何も知りたくないと呼ぶ  
自分がいた

大沢は ただ宏の白い寝顔を見つめていた

## 17・大沢たかし ―再会（後書き）

評価・コメント・感想など  
頂けますと今後の励みになります  
よろしく願いいたします



## 18 寺山宏・帰る場所

### 18 寺山宏 - 帰る場所

その夜 宏は額に汗を滲ませ 小さくうなされ続けていた  
宏の身体は小さく震え うわごとのように「いやだ」と「やめて」  
を繰り返す

その合間に自分の名前が呟かれた「大沢・・・助けて」と

宏が自分を頼って何者かの手から逃れてきた事は想像に容易かった  
しかし それがどういう経緯であったのか

また どんな状況であったのかは全く判らない

大沢は眠る宏の傍らに腰をおろし 一晩中一睡もせずに付き添って  
いた

明け方 ついとうととまどろみかけた一瞬に

仄暗い朝靄と薄白い夜明けの中で夢を見た

天使のような微笑みをたたえた宏が両手を広げて大沢を抱き締める  
そんな夢だった 夢の中で宏は眩いばかりの光に包まれていた

そして自分は漆黒の闇色の羽根に包まれていた

闇色の羽根は宏の身体に触れると崩れるように散り散りに砕けて消  
えていった

自分もまた 宏に触れた時 ちりぢりに消えてゆくのだろうと思った  
夢の中 それでも自分は宏に触れずにはいられない

触れたら最期 崩れてこの世から儚く消え去るのだ そう感じてい  
ても

その身体を抱き締めずにはいられなかった

誰もこの存在を 宏を汚すことはできない

この神々しい程に美しく儚い存在に何者も触れてはならないのだ

そんな啓示を見た気がした  
目覚めて尚 大沢の心には 強くこの夢の残像が焼き付いていた  
宏を傷つける者は何人たりとも許さない  
俺が守ってみせる

その為に 塵と果てようとも何の後悔があるだろう  
宏を弱らせここまで怯えさせた相手が許せなかった

気づけば

宏の寝顔を見つめながら 大沢はきつく爪が食い込む程に  
自分の両手を握りしめていた

この拳は誰に向かって振りおろされるべきものなのか  
宏から聞き出して自分はそいつを殴りに行くのだろうか  
そいつのしたことを宏の口から聞きたいと

自分は本当に望んでいるのだろうか？

「つくそつ・・・」

思わず小さな悪態が零れた

その声に気づいたのか

宏がゆつくりとその大きな瞳を開いた

何度か静かに瞬きをした後 宏の瞳は大沢の姿を捕らえた

「・・・大沢・・・ここは・・・どこ？俺・・・」

「身体は大丈夫か？どこか痛む所はないか？気分は・・・どうだ」

「・・・俺・・・」

「・・・宏？」

宏の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた

それを拭おうともせず 宏はただ嗚咽を堪えながら涙を流し続けた  
大沢は ただそんな宏を見つめていた

しばらくして 少し宏が落ち着いてきたところで  
大沢は優しく宏の背中を2回ポンポンと軽く叩き 部屋を出て行った

間もなく 大きなマグカップを持って部屋に戻ってきた大沢は  
宏にそれをそつと差し出した

「暖かいカフェオレだから・・・飲むといい」

「・・・ありがとう・・・」

素直に受け取り それに口をつける

「甘い」

「イヤな事があつた時や疲れた時は甘いものに限る」

「・・・うん・・・」

こくりと頷くと 宏はマグカップにカフェオレをゆっくりと飲んだ

「何も・・・何も聞かないんだな 大沢・・・」

「・・・話したくなったら話せばいい」

「今は・・・話したくない」

「だったら それでいい」

「・・・うん」

「雑誌で見かけた 忙しそうだな」

「・・・うん 自分でも意外だったんだ こんなになるなんて・・・」

「彼女も心配してたよ・・・宏に向いてる世界なのか・・・どうかって」

「幼馴染みって 離れてみると肉親みたいなものだったんだあって  
俺も最近になって彼女に連絡しなくちゃって思ってたところだ」

「画廊でバイトをしている」

「そうか・・・好きな絵に囲まれてるってことだね」

「お前が黙っていなくなったのがかなりショックだったと言っていた」

「・・・悪かったと思ってる」

「俺のせいだよな・・・」

「・・・大沢」

「でも 今でも俺の気持ちに変わりはない それだけは変わらない」  
「・・・大沢」

宏はその後 大沢と近所のラーメン屋で食事を共にして帰って行った  
無理に引き留める事はしなかった

何があつたのかも聞かなかった

次にいつ会えるのか そんな話もしなかった

大沢はただ 宏が自分を頼ってやってきてくれた事だけでよかった  
何かあつたらまた連絡をしてくる

きつと 宏はまた元のように俺や彼女の元に戻ってくる

大沢はそう信じていた

そしてまた 自分の心も変わることなく宏を待ち続けると

## 19・私・気づかずにいた事

19・私―気づかずにいたこと

大沢が画廊にやってきた

昨晚 宏が訪ねてきたという

詳しい様子を話そうとしない大沢だったが

それならなぜ私をわざわざ訪ねてきたのかと問えば

いつか 君の所へも宏が助けを求めてくるかもしれないから

その時には暖かく迎えてやって欲しい という

当たり前だ 言われなくてもそうする と応えたと

安心したように微笑んで帰って行った

宏に何があつたのか 私は知る術もない

大沢もまた実のところ 何も知ってはいないのだと思った

しかし 大沢の胸に宿る激しい怒りが手に取るように伝わった

おそらくは宏を傷つけた誰かを大沢は殺したい程憎んでいる

それでも 宏からそれが誰なのか

一体何があつたのかを聞き出そうとはしない大沢

知らずにいる優しさもあるのだろうと思った

大沢は 全てを受け止める覚悟を決めたのだろう

そして私にも同様の優しさを持ち続けてくれと言いにきた

優しさ？

私の胸の中にある思いはそんな綺麗なものじゃない

私は大沢に淡い恋心を抱いていた

そしてその大沢が恋する宏をも 私は愛しく思っていた

そう

私は二人に恋して病まないのだ

二人の少年 今はもう立派な青年になった二人が  
私の理想型であり 憧れであつた

だから

私は二人を失いたくなく

二人を誰にも渡したくないのだ

それは醜い独占欲

はてしない執着心は私の心を暗く濁す

そのどちらをも選ぶ事もできなければ  
おそらく

私が彼らのどちらかに選ばれる事もないのだろう

だから それならばいつそのこと

私は二人が上手くいけばいい そう思った

そうすれば 二人を誰かに奪われる事もなく

私は変わらず彼らの側にいられる

屈折した私の想い これも一つの恋の形

大沢の心の闇を覗いた時 自分の闇にも気がついた  
恋に正解などないのだから

私の恋もまた一つの形

大沢にも宏にも 告げる事のない私の想い

私はいつか 二人とは違う誰かと家庭を築き子をもうけ  
ごく普通の生活に幸せを見出してゆくだろう

そうする事で 絶対に叶う事のない恋を忘れていくのだ  
そうしながら

きつと 死ぬまで私の心の片隅には

大沢と宏という二人の少年が住み続ける

手を伸ばせば届く距離にいるのに 絶対に届かない彼ら  
二人の間にはどの位の距離があるのだろうか

大沢が高校の3年間をかけて出した結論に

宏はどう応えてゆくのだろう

私にできる事は これからもずっと

二人を見守ってゆくこと

それは 私の屈折した恋心と純粋な好奇心  
いや 醜いあがきなのかもしれない

季節はめぐり 短大と言うところは入学した年と卒業する年しかない  
よって 私は追い立てられるように就職活動をして  
とある企業の広告デザインの仕事にありついた

宏の姿は相変わらず数々の雑誌でみかけ  
最近ではテレビのCMも数本みかけるようになった  
そんな宏の姿は どこか現実感に乏しく  
自分のよく知る宏とは別人のように思えてならなかった  
宏が私に助けを求めてやってくる事もなく  
何事もなく 平和に ただ流れて時間が過ぎていった

## 20・寺山宏・目指すもの

20・寺山宏　―目指すもの

大沢は何もきかなかった

宏がボロボロの姿で泣きすがり　助けを求めたあの夜

大沢はただ静かに宏に付き添い　その背中を叩いてくれた  
小さな子供にするように　頭をくしゅくしゅと撫でられた  
それだけだった

それでも　宏は吉田から受けた恐怖を払い除け　己を取り戻す事が  
できた

頼れるもの　帰れる場所がある事の幸せを実感した

自分の外側ではない内面を認めてくれる者のいる安心感に浸った  
また半面

自分がこのままでは与えられるばかりで

何も与えられるものがないのでは　という焦燥感を覚えた

大沢という男は高校生の頃から随分と落ち着いた男だった  
それが　今では更に

自分の生き様に揺るぎのない自信に満ちた男になっていた  
その懐の深さに甘えそうになった自分が情けなかった

大沢が何も尋ねずにすませてくれた事に感謝しつつ

不甲斐なかった自分を恥じた

変わらなくては

逃げてばかりでは何も始まらない　何も変わらない

宏は　はじめて自分が見て見ぬふりをし続けてきたものに  
直面しようと覚悟を決めた



それから宏は モデルという仕事に拘りを捨てた  
自分の外見が求められるのならそれでよいと割り切る事ができるよ  
うになった

そうなってみると 現場ごとに求められるキャラクターが見えてくる  
時には挑戦的な視線の青年にもなり

時には無邪気に微笑む無垢な少年のようにもなれた  
そんな宏の変化に周囲は驚きつつも対応は暖かった

それまで冷たく遠く取り巻いていた同性のモデルたちも  
宏の仕事への取り組みが変わった事でその付き合い方を変えてきた  
仲間として認められ 宏は居場所を見つけた

本当の自分を知っていてくれる人が一人でもいればそれでよい  
そう思えるようになった

雑誌やポスターでの自分を見て 自分の全てを知る人などいない  
だからこそ その虚構の世界の自分は自分で演じればいい  
そう思えるようになった

大沢という存在が宏の内面に大いなる影響を与えていた

気負わず 構えず 嘘をつかず

宏はただ自然体で仕事に臨んだ

内面までさらすことはない ただ求められる「寺山ヒロシ」であれ  
ばいい

そんな宏はひっぱりだこの 押しも押されぬ人気モデルとなってい  
った

ある日の撮影で 宏はあの吉田カメラマンと再会した  
二度と会いたくないと思っていた相手ではあったが  
宏は笑顔で挨拶を交わすことができた

そして自分の肩に伸ばされた吉田の手をさりりとかわす事もできた  
「次はもう 自由にできるなんて思わないで下さい」

艶然と微笑みながら吉田を睨め付けた

「・・・肝に銘じておくよ 次からはもつと正攻法で君を口説く事にする」

吉田もまた宏の変化に気づいていた

宏はがむしゃらに毎日を過ごした

大学の講義には休まず出席し 完璧なレポートを作成した

そして 休む間もなくまれたスケジュールでモデルの仕事をこなしていった

母の入院費と自分の学費のために 馬車馬のように働いた  
モデルの仕事の合間には少ない時間をさいて建設現場で  
夜間に肉体労働のバイトもした

そんな無理はそうそう続けられるはずもなく

宏は秋口の涼しい風が吹く頃に体調を崩した

一人アパートで天井を見上げ 熱にうなされながら携帯をとった  
素直に助けを呼べよ

そんな大沢の声が聞こえた

「・・・もしもし・・・俺・・・宏です 悪い 体調崩した・・・」  
「家か？何か食えるものを届けてやる 待ってる」

大沢は連絡もせずにごった数ヶ月について何一つ言う事もなく

あたりまえのようにそう言うと言話を切った

そして 2時間もしないうちに 大沢は宏の幼馴染みを伴って  
宏の部屋へとやってきた

「宏・・・熱あるの？大丈夫？無理しすぎなんじゃないのぉっ！  
！」

彼女もまた かれこれ1年以上も顔を合わせていなかったのに  
そんなことには一言もふれず まるでつい昨日まで高校で

仲良く同級生をしていたそのままのように宏のおでこに手をあてた  
宏は布団にくるまりながら くすぐったいような幸せに浸っていた

大沢と彼女は狭い宏の部屋の中であれやこれやと宏の世話をやいた  
彼女はお粥を作り いくつかの総菜をタッパにつめ冷蔵庫に収めた  
「適当に暖めて食べてね 何かあったら母さんもいるから言ってね」  
また 宏の耳元にこっそりと囁いた

「素直に正直になるんだよ 幸せって近くにありすぎると気づかな  
いものだから

私も気づいたのは最近だけだね」

そついうと 宏にバイバイと手をふって帰って行った

「大沢も 忙しかったんだろ 悪かったな サンキュ」

「いや・・・具合の悪い時はお互い様だろう」

「でも お前が具合悪くなるなんてなさそうだよな」

「そうだな 健康だけが取り柄だ」

「そんなことを言ってるんじゃないけど・・・お前は自己管理がで  
きてるって事」

「お前は頑張りすぎただけだ 自己管理はよくできてると思う」

「・・・ありがとう・・・」

「いや」

ぼそりぼそりとしやべる大沢の朴訥さがあったかった  
高校時代と変わらぬ居心地の良さに宏の瞼は重くなった  
すうすうと寝息を立て始めた宏をしばらく見つめた後  
宏が治るまで泊まり込むと宣言していた大沢もまた  
ベッドの下に薄いマットを敷き毛布にくるまった

3日目には宏は食事也十分とれるようになった

大沢は宏のレポートなど大学の提出物を手伝い

自らも持参した参考書と格闘しながら宏の部屋で過ごしていた

お互い 何を話す訳でもなく

それぞれに好きな事をして過ごす時間が心地よかった

一度失って初めて知った大切な時間だと思った

素直になろう そう宏は思っていた

宏の体調がすっかり元に戻り もう一人でも大丈夫だということになり

大沢が帰り際 宏に言った

「・・・助けを呼んでくれて嬉しかった」と

それを聞いた宏は自分でも思いもよらない行動にでた

大沢の唇に そつと 自分の唇を重ねたのだ

「・・・!・・・」

驚いたように目を見開いたままの大沢に 照れくさそうに宏は笑った

そしてもう一度 少しゆつくりと唇を重ねた

抱き合う事もない ただ唇を軽く重ねただけのキスだった

「俺の方こそ ありがとう」

「・・・おうっ・・・」

大沢は小さく頷くとそのまま部屋を出て行った

宏の胸の中にほんわかと暖かいものが溢れていた

## 21・寺山宏・素直になって 手をとって

21・寺山宏　・素直になって 手をとって

素直になれた そう思っていたのに

ようやく その差し伸べられた手をとって その思いに素直に応えられると思ったのに

神様は俺に今まで自分の心を偽り続けてきた罰を下したのか？

まだまだ苦しみというのか 悩めというのか そして俺から全てを奪うのか？

大沢が病院へ運ばれた

大学3年の夏だった

頭を強く打っており 意識不明の重体だった

バイクに乗った大沢の前を犬を追いかけた少女が横切ったのだ  
少女を避けて大沢は転倒した 大学へ向かう途中だった

運ばれた病院で 大沢は手術を受けた

幸い 命は取り留めたが意識は戻らなかった

知らせを聞いて 宏は病院へと駆け付けた

ガラス越しに見える大沢は包帯だらけでいくつものチューブに繋がれ  
まるで映画に出てくるモンスターのようなだった

涙で曇る大沢の姿を 宏はただガラスに額を押しつけて見つめていた  
集中治療室を出るのに1ヶ月を要した

その後 一般病棟に映ってから 大沢の意識は戻らないままだった

大沢の入院後 宏は自分の母と大沢の二つの病院へ通い続けた

社会人になった幼馴染みの彼女もまた二つの病院をしばしば訪れた  
大沢が運ばれてから10ヶ月以上が過ぎようとしていた

季節はめぐり 再び暑い夏が訪れようとしていた

「大沢君 顔色もよくて よく眠ってるって感じよね……」

「ああ……先生も どうして意識が戻らないのか判らないって  
言ってた」

「何かきっかけがあれば……帰ってきてくれるのかしらね……  
大沢君」

「……うん……」

「宏は就職どうするの？もう4年の夏なのに」

「うん……建築士の資格は取ったんだ なんとか……でも  
就職活動はすっかり出遅れちゃったからね……このまま今の事務  
所で

モデルの仕事をしていこうかと思ってるんだ」

「そうなの？」

「うん……最近 結構コンスタントに仕事も入るし CMとかの  
大きな仕事も任せてもらえるようになってきたしね

面白くもなってきたんだ 正直さ 最初はなんだかなあ……って思  
ってたんだけど

大沢に背中押してもらったからかな……」

「大沢君に？」

「うん 事故の前にさ 会ったときに言われたんだ

お前がお前らしくいられる場所があるならそれが一番だな って」

「宏らしく……いられる場所？」

「うん……俺 自分の外見ってあんまり好きじゃなかったってい  
うか

あんまり意識した事なかったんだ でも それを好きって言うてく  
れる人がいて

俺が表現したものが何か人に伝えられたりするって凄いなって

単純にそんな仕事 なかなかないしなあってさ

できる限りやってみようかと思うようになったんだ」

「そう……応援するね　きっと大沢君もそう思ってるよ」

「うん……だいたいな」

「早く　目を覚ましてくれるといいね」

「うん……きつと　きつと　ああよく寝たってケロッと起きるよ・  
きつと」

「そうだね……」

二人　そう言い合って　そう信じたいという気持ちを肯定し合った

眠り続ける大沢と二人つきりになると　宏は大沢の手をとりその指の爪を切った

「こうして　お前の爪切るの　すっかり習慣になっちゃったな……  
ホントはお前が俺の爪切ってくれてるって言ってたのにな……」

窓の外では　セミが夏の終わりに最期の声を振り絞っていた

大沢の声がききたかった

その手で背中を叩いて欲しかった

その腕で抱き締めて欲しかった

今なら判る　自分の正直な気持ち

素直になれる

宏は大沢を必要だと感じていた　そして誰よりも愛していると

## 22・寺山宏・目覚め

22・寺山宏　・目覚め

「寺山君　たまには付き合つてよぉ　いつも付き合い悪すぎい」  
「ごめんね　行かなくちゃいけない用事があつて　また誘つてね」  
「いつつもそう言つて断るぢゃぁ　ん　どこ行つてゐるの？　いつつも  
お」

「残念ながらみんなで楽しく行けるような所じゃないんだ」

「えええ　つえつ　どこお？」

「病院」

「どこか悪いのお？　寺山君」

「いや　友人がずっと入院してるから見舞いに行くんだ」

「友だちい？　恋人なんじゃないのお」

「そうだね　そうかもしれないね　それじゃまた　さようなら」

「えええ　つえつ」

モデル仲間の甲高い声から逃れるように　宏はスタジオを後にした  
玄関を出ようとした時　不意に背後から肘を掴まれた  
突然の事にぎよつとした拍子に小さな悲鳴をあげてしまった  
「ひえっ？！」

「ははは（笑）　妙な声ださないでよ寺山くん　何急いでるの？  
送つていこうか？　僕　車なんだけど」

「・・・・・・結構です」

声の主は撮影を終えた吉田だった

「つれないなあ・・・・・・運転手になろうって下手に出てゐるのに」

「お気持ちだけありがたく頂戴しておきます」

「冗談ぬきにさ　送つていくよ　雨が降ってきたみたいだよ」



「えっ？」

「傘 持っていないんでしょう？遠慮しないで ああ 何もしやしない  
って」

「……結構です」

「頑固だなあ・・寺山クンは・・本当に前回の事は反省したって  
もうあんなマネはしないよ だからこうしてちゃんと真面目に  
お誘いしてるのになあ」

軽い口調の吉田はどこまでが本当でどこからが冗談なのか判らない  
宏は結局 スタジオの玄関で 外が本当にひどい雷雨で在ることを  
知り

大人げなく濡れてゆくのもどうかと思いとどまり

吉田の大きな4WDの助手席におさまった

「病院へ行くんでしょう？寺山クン」

「！どうしてそれを？」

「さっき自分で言ってたじゃない 女の子たちに  
それに 調べたんだ 君の大切な友人が意識不明のまま入院して  
るんだってね」

「……ええ」

「恋人じゃないかって さっき話してたよね？」

「……ええ」

「そう……へえ」 大沢たかし って男の名前だけど」

「なっ！……どこまで調べたんですかっ？」

「君の事なら何でも全部調べたよ 僕は案外しつこいタチでね  
一度狙った美人は落とすまで粘るんだ（笑）」

「……」

「なあゝんてね 半分本気で半分冗句だから気にしないで

君がさ 最近変わったなあって思って 何が理由なんだろう？って  
気になっていろいろ調べちゃったんだ ごめんね

で 親友が植物人間になっちゃって 一人健気に頑張ってるってト

コ？

なんか涙誘われちゃうねえ　僕は何か力になりたいだけなんだけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宏は吉田の車に乗った事を悔やんでいた

信頼したのが間違いだった

そもそも　あんな卑劣な手を使って自分を抱こうとした男だ  
そんなに簡単に紳士になるワケがない

そう気づいた時には既に車は見知らぬ道筋を辿り始めていた

「吉田さんッ！僕は駅まで結構ですから　もう下ろして下さい」

「送っていくっていったら？おとなしく乗ってなさい」

「どこへ行くっていうんですかッ！病院でも駅でもない方角に向かってるッ！」

「へえ　方向感覚いいんだね　そ　俺の家に向かってる」

「なっ・・・・・・・・下ろして下さい　下ろせよッ！車を止めるッ！」

「そんなに警戒しないでよ・・・・・・・・こないだみたいなマネはしないよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ただし　暴れられたりしたら困るなあ　どんな運転になっちゃうか知らないよ」

「・・・・・・・・ちくしょうっ・・・・・・・・」

「寺山クンてさあ　黙ってる時と口聞いたときの印象違うよね　くつくく」

なんかおとなしそーな美人なのに　中身は案外タフな野郎だった  
りしてさ

そんなアンバランスな所も魅力だよ

押し倒して　ねじ伏せてみたくなる　くつくく（笑）」

「あんだ・・・おかしいよ・・・どうかしてる」

「君の毒にあてられて狂ったんだよきつと（笑）だから責任とってもらわなくちゃ」

「っな・・・なにを言ってる」

「とにかく 今はおとなしくしている方が良い 君だってそんなにバカじゃなからう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ゆっくりさ・・・」

「え？」

「ゆっくり 君と話がしたいだけだよ・・・これは本当だ 信じて欲しい」

「そ・・・そんなこと信じられるワケないでしょう・・・」

「君はさ・・・高嶺の花っていうか ガードも固くなっちゃったしこんな方法でお姫様を攫うみたいだなマネしてごめんね・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

吉田はそれっきり口をきかなかった

宏もまた 口をつぐんだまま おとなしく助手席に収まっていた車は静かに走り続け 間もなく瀟洒なマンションの前に止まった

「着いた・・・妙なマネはしないと約束するよ だから

コーヒーだけでも飲んで行ってくれないか？後でちゃんと本当に病院まで送り届けるから・・・」

## 22・2・吉田の懺悔

吉田の声は神妙で 先ほどのどこかふざけたような軽い雰囲気は払拭されていた

宏はその吉田の様子に 警戒をとかないまま素直に従う事にした  
部屋へと促され宏は吉田についてマンションへ入った

部屋はモノトーンの都会的なインテリアで統一され

あまり生活感のない いかにも独身男性の一人暮らしな様子であった  
「座つてて・・・コーヒーいれるから」

吉田の指し示したソファーに宏は腰をおろした

どうしても前回 吉田に薬を飲まされて襲われかけた都心のマンションと

この吉田の部屋の内装が重なって見えてしまい

宏は落ち着かず固い気持ちをほぐせずにいた

そんな宏を知ってか知らずか

コーヒーメーカーの準備をしながら吉田は柔らかな声で宏に話しかける

「寺山クン 入院してる友だちって高校からの同級生なんだってね」

「・・・そんな事まで調べたんですか」

「ああ・・・君の事 何でも知りたくてね 可笑しいだらいい大人がさ

アイドルのおっかけみたいに君の事知りたくて

君の事務所の子とか モデル仲間とかにきいて廻つてさ」

吉田は振り向くと 照れたような小さな笑みを見せた

その顔はどこか居心地が悪そうで

いたずらを叱られた小さな子供のようだと宏は思った

「・・・吉田・・・さん・・・」

「僕はさ いつも結構軽い奴を気取ってるだろ？だから  
周りもそのつもりで付き合ってくる奴らばかりだね」

そんな中で 君は随分かわった子だなあって・・・気になってたんだ」

「・・・かわった？」

「うん・・・なんだかね モデルなんてやってる奴らはさ  
みんな自己顕示欲の塊っていうか 自分が大好きな奴らばかりなんだ

それなのに 君と来たら自分の事なんてまるで判ってないっていうか  
どう見られるとかどう見えるなんて事に全く無関心みたいで」

「・・・そんな・・・」

「新鮮だった でもそれも君のスタイルみたいなもので  
そんなキヤラを気取ってるのかなとかうがってみたりして

結局のところ イマドキの軽いちゃらけた若者なんじゃないかって  
手に入れたいって 無茶してもいいか思ってしまったんだよね」

「・・・・・・」

「申し訳なかった・・・本当に 後悔してる 君は本当に純粋なだけだったのに」

「・・・・・・」

「君の事調べて いろいろ知って本当に後悔した  
謝りたいと思いつながら時間ばかり過ぎてしまった」

「・・・もう・・・もう いいですよ」

「優しいな君は 益々惚れちゃうよ ははは（笑）

最近は何 ちょっと心配してたんだ 君のこと」

「心配・・・ですか？」

「ああ・・・なんか ムキになって仕事してるっていうか  
今まで以上に自然体なんだけど それがどこか痛々しくてたまらな  
かった

モデルの仕事は 楽しいかい？」

「・・・ええ・・・それなりに・・・最近は」

「そうか 確かにいい表情やボーリングが決まるようになってきたよな

でも 本当に自分で表現したい事 できてると思う？」

「・・・表現・・・」

「モデルなんて ただ洋服や商品を見せるためのマネキン なんてそんな風に思ってたら間違いだと僕は思う

モデルの魅力があつて初めて その商品の魅力も輝くんじゃないかな・・・」

「モデルの魅力・・・」

「君はとても魅力的な人だ でも君は誰の事も見ていないただ一人の誰かにむかつて生きている そうだろ？」

「・・・・・・」

「きつと それがその病院で君を待っている彼なんだろう？」

「・・・それが・・・それは いけない事ですか？」

「いけないさ」

「なっ・・・」

「モデルがカメラをみないでどうする カメラの向こうに何千何万の人の目を意識しないでどうしていい表現ができるっていうんだ」

「人の・・・目」

「君は今 その持つて生まれた恵まれた容姿と新鮮な存在感で売れる

ただ そんなものはすぐにみんなが慣れてしまうんだ

ありがたみももの珍しさもなくなった時 君は忘れられる」

「・・・・・・」

「僕は君にそんなモデルで終わって欲しくないんだ」

「・・・吉田さん・・・」

「君を抱きたいって今でも思ってるよ（笑）死ぬほど欲しい

今だって 押し倒したくてフラフラする けど 俺も自分の仕事に誇りがある

君はもつともつと光るべきなんだ　だから・・・

あとは君の　君自身の問題だけだね　黙っていられなかった」

「・・・・・・・・・・」

「コーヒー　飲もう　飲み終わったら送っていくよ」

「・・・・・・・・・・」

宏は何も言い返せずにいた

吉田に指摘された言葉達が胸に刺さっていた

がむしゃらにこなしてきた仕事に正直自分でも納得がいつているとは思っていなかった

大沢に認められたい　大沢が認めてくれればそれでいい

そんな風に思っていた

だから

正直　薬で好きにされそうになった時よりショックだった

変わりたい　そう願った自分に　吉田のくれた言葉達がありがたかった

「送っていいこう」

「はい」

「彼が一日も早く目覚める事を祈ってるよ」

「はい・・・・・・・・・・ありがとうございます」

「あんな事をしておいて言えた義理じゃないけど

無理して自分を切り売りする事はないと思うよ・・・・・・・・

君らしく　大切なものを大切に想いながら　生きていつて欲しいよ」

「・・・・・・・・・・吉田さん・・・・・・・・」

「君がチャラチャラしたイマドキの若者だったらよかったのにな（笑）

こんなひどい罪悪感に苛まれる事もなかっただろうに  
僕は心底自分をイヤな奴だと思って後悔したよ（笑）

今から君に見なおして欲しいなんて言えないけど……

それでも どうか 僕の気持ちもちよつとくらいどこかにひっかけておいてくれよ」

「……はい」

「それじゃ また仕事で」

「はい……送って頂いてありがとうございます コーヒーご馳走様でした」

「うん じゃあね」

吉田は 宏を病院の前で下ろすと そのまま軽く手をあげて微笑んで去っていった

月明かりが白く宏を照らした



## 23・大沢たかし - 生還

23・大沢たかし - 生還

面会時間を過ぎた病院の中は静かだった

特別に入れてもらった大沢の個室で 宏はベッドの傍らに椅子を置き腰掛けていた

眠り続ける大沢の顔を見つめていた

今はもう痛々しい包帯も 沢山のチューブも繋がれていない  
ただ そこに横たわり静かに眠り続ける大沢の姿があった

宏は大沢の手をとるといつものように指の爪を切り始めた

一人 誰にともなく 聞く人もいないはずの部屋の中でぼつりぼつりと

自分の心のうちを語りながら爪を切った

「俺は・・・結局何も判ってなかったって事だよな・・・仕事の事も 自分の事も

気づかないフリして過ごしてきたって事なんだ・・・ずるかったな  
大沢がいてくれるのだって 当たり前前思ってた

いつでもこの手を差しのばしてくれてるって甘えてたんだよな

いざ その手をとろうって思った時には遅かった・・・

俺 大沢に伝えてないんだよな・・・好きだよ・・・とつてもとつても

いてくれるのが当たり前だと思ってた  
いなくなるなんて考えた事もなかった

でも

生きてこうしてここにいてくれるだけでもいい

お前が死んでしまわなくて本当によかった・・・好きだよ・・・大

沢・・・」

宏はちいさく呟きながら握りしめていた大沢の手の指先にそつと口づけた

「疲れたな・・・寂しい時って何かしてないともたなくて・・・がむしゃらに働いてみたんだ　でもダメだった

さつきある人からも言われたんだ　自分にちゃんと向き合わなくちゃダメだって

大沢もずっと俺にそう言ってたんだよな・・・自分に正直に生きるって事

簡単そうで難しくて　でもやっぱり一番大切な事なんだよな・・・疲れたんだ・・・明日から・・・明日からまた頑張るから　今日はもう

弱虫な俺のままで許して・・・ごめんな　大沢・・・」

宏は大沢の手を握りしめたままそのベッドに頭をのせた

椅子に腰掛けたままベッドに顔をふせ　間もなく宏は静かな寝息を立て始めていた

病室の薄いカーテン越しに朝日が眩しかった

ベッドにつつぷしたまま眠り込んでしまった宏は　後頭部に優しく触れる何かの感触に

穏やかな気分で目を覚ました

「んんっ・・・いつけねえ・・・寝ちゃった・・・っあっ！」

「おはよう　宏」

「・・・！！！」

宏の髪をやさしく撫でていたのは　ベッドに横たわった大沢の手であつた

優しい笑顔で目を細めて宏を見つめる大沢の姿に

宏は我が目を疑った

しばらくの間　まだ自分は夢の中にいるのかとさえ思った

大沢が目覚ました

宏は声もなく　大沢の顔を見つめていた

我に返ってナースコールをしたのは　それからどれ位の時間がたつてからだっただろうか

駆け付けた医師とナースたちによって大沢はすぐに検査室へと連れ去られてしまった

宏はただ呆然と病室に残された

ようやく気持ちが落ち着いてきて初めて　宏は幼馴染みの携帯へメールをいれた

「大沢が目覚ました」たったそれだけの短いメールだった

宏は大沢が検査を終えて病室へ戻るまで　椅子に座って待ち続けた  
飼ひ慣らされた犬のように　ただ静かに座り続けていた

驚いた事に　大沢は検査から車椅子にも乗らず　医師達に支えられてはいたが

すっかりとした足取りで　病室へと戻ってきた

そして　宏の顔を見ると顔中に華やかな笑顔を見せた

「・・・宏・・・」

「大沢っ！」

言葉が見つからず　宏はただ大沢の手をとった

蕩けるような優しい笑顔で大沢がそれに答えて宏の手をきゅっと握りかえした

医師達が一通りの検査と処置を終え病室を出て行くと

宏に向かって大沢はしっかりとした声で言った

「ずっと・・・ずっと夢を見ていたんだ 寺山の・・・宏の夢  
もう一度必ず会える 会いたいつてずっとずっと願ってた よかつ  
た 俺戻って来られた」

「ばか・・・」

「三途の川ってホントにあるぞ 俺見てきたからなあ・・・嘘じゃ  
ない

宏が反対岸から帰ってこい帰ってこいつてしつこく叫んでたから仕  
方なく帰ってきた」

「ばあか」

「もう少し 優しくしてくれ」

「バカ野郎」

「心配かけてすまなかった」

「大馬鹿野郎」 宏の声は少し震え 瞳は涙で滲んだ

「事故ったんだよな 俺・・・女の子は無事だったのかな・・・？」

「ああ・・・犬も女の子も擦り傷一つなかったよ」

「よかった・・・」

「お前は2年近く意識も戻らず タイムトラベルって気分だろ？」

「そんなにっ・・・そうか・・・そうなのか・・・」

「でも・・・でも本当にヨカッタ お前が戻ってきてくれて・・・」

「

「うん」

「大沢・・・」

「ん？」

「ちゃんと言うよ・・・俺・・・まだ大沢は俺の事想ってくれてる  
か？」

「・・・宏？」

「俺・・・大沢の事 大切に想ってる 好きだった ずっと

たぶん 高校の頃からずっと・・・卒業式に素直になれなかった  
すまなかった」

「宏・・・」 大沢の瞳が優しく細められる

「お前の爪……ずっと切ってやったんだぞ 俺の爪……キレイにしてくれよ……」

「おうっ……退院したら……俺がずっと切ってやる」  
「うん」

覗き込むように顔を近づけた宏と受け止めるように微笑んだ大沢の二人の唇がどちらからともなく静かに重なった

すれ違い 掛け違ってしまった時間を埋めるように

二人はお互いの唇を求め合った

## 24・二人の時間 再び

### 24・二人の時間

目を覚ました後の大沢は医師達が驚く程の回復を見せた

その後2週間程病院で過ごした後

あとは通院によるリハビリで大丈夫でしょうとの診断を得て 無事退院した

宏は友人から車を借りて 大沢の退院を迎えに行った

「じゃあ 俺 車返してくるから また後で寄ってもいい？」

「もちろん・・・待ってるよ」

「ああ・・・じゃあ また後で」

「宏っ！」

「なに？」

「事故るなよ・・・今度はお前だったりしたら洒落にならない」

「（笑）わかつてる 気をつけるよ じゃあ」

「ああ・・・じゃあ また後で」

大沢は一人残った自室で病院から持ち帰った荷物を片付けた

2年近い年月 主を待ち続けていた部屋は時が止まったままだった  
あらかじめ 宏が簡単な掃除をして片付けておいてくれた為  
それ程にひどく荒れた様子もなかったが

壁にかけられたままのカレンダーが事故の日からそのままになって  
いた

ぼんやりと座り込んでいた

長い夢から覚めた

戻ってきた

そして

宏が自分を好きだという

これはまだ夢の続きなのではないだろうか……

大沢はふと忍び寄る不安におののいた

思わず両手で自分の身体を掻き抱いた

カチャリという小さな音と共に静かな足音が背後に迫り

怯えたように腕で自分を抱き締めている大沢を背中から暖かいものが包んだ

宏だった

「どうしたの？大沢？」

大沢の耳元にそつと囁きながら宏は大沢を抱き締めた

「なんでもないさ……まだ夢を見ているような気がする」

「夢じゃない 大沢は帰ってきたんだ この部屋に 俺の前に」

「宏？」

「ん？」

自分の胸元にまわされていた宏の腕を掴むと

大沢は宏を自分の膝の上へと抱き寄せた

引き寄せられるように腕をとられた宏は素直に大沢の腕の中に収まった

「どうしたの？大沢……」

「宏……本物だ……触れる事ができる……」

「うん……本物だよ 沢山触って」

「俺の宏」

「うん……爪の先まで全部」

「もう離さない」

「どこにも行くなよ……俺を置いて」

「もうどこにも行かない」

「うん」

「宏……一緒に……一緒に暮らさないか？」

「大沢……うん もう少し広い部屋を捜さなくちゃいけないな」  
「いいのか？」

「ああ 俺も大沢と一緒にいたい」

「宏……」

「ん……」

大沢は宏をそつと横たえろと唇を寄せた

重なる唇 深くなる口づけ 絡む舌先から顎へと唾液が伝う

「お おおさ……わ……俺……俺……」

「愛してる……宏」

「うん……」

「抱かせて」

「うん……」

大沢は小さく頷いた宏の白いうなじに噛み付くように口づけた



## 25・求め合って 溶け合って

25・求め合って とけあって

時が巻き戻されていく

桜の花びらが舞い散る中へ 青春という名の日々へ

二人の時間が戻ってゆく

あの日

受け入れることが出来なかったのは

彼ではなく 自分の本当の心の声

今はそれに素直になれる

宏は大沢の重みを胸に暖かく感じながらそう思った

「宏……」

耳元で呼ばれる自分の名が心地よい

ひとつずつ外されていくボタンの数をぼんやりと数えた

見つめられている胸元で 触れられる前からその尖りが震える

そっと口づけられて 身体がぴくりとはねる

啄むように何度も繰り返し口づけられて

ぷっくりと充血して尖ったそれに柔らかく歯をたてられて

宏の口から耐えきれず甘い吐息がこぼれた

背中に薄い絨毯が擦れるのをわずかに熱いと感じた

胸元に与えられる刺激から逃れようと無意識に身体をよじる

肩を掴まれ抱き戻され 喘いだ拍子に唇を塞がれた

大沢の舌に口腔を犯されその動きに翻弄される

意識が白く霞みはじめた頃

宏はふいにふわりと抱き上げられ固く閉じていた瞳を開いた

「……おおさわ？」

「寝室へ行こう」

抱き上げられたまま寝室のベッドへと運ばれる

固いスプリングの上にそつと下ろされ

そのままわずかに身体にまとわりついていたシャツを剥ぎ取られる  
下着ごと履いていたジーンズを脱がされ

宏は生まれたままの姿でたよりなくシーツを掴んだ

「宏・・・キレイだ 本当にキレイだ」

もどかしそうに自分も着ているものを全て脱ぎ去ると

大沢は宏に重なるように覆い被さってきた

触れ合う素肌が温かく心地よかった

宏の滑らかな肌を確かめるように大沢の手が身体中を滑る

淡い茂みの中で既に腹を叩く程に昂ぶっていた宏自身に

大沢の手がそつと伸び それを包み込むように愛おしそうに握りしめた

「っふぁあっ・・・」

宏の口から耐えきれず嬌声が漏れた

吐息の全てを奪うように大沢の唇が重ねられ

深くなる口づけと 大沢の手によつてもたらされる刺激とで

宏は身をよじりその快感に震えた

目尻に涙が滲んだ

大沢の唇が宏のうなじから胸元を這い

下腹部へと滑るように下がっていった

その先端から甘い蜜を零しているかのように

大沢はちろちろと舌先を尖らせて宏のそれを舐め取った

「あっ・・・んっ・・・」

激しすぎる刺激に思わず宏の腰が逃れようと浮いた

抱き戻されて 大沢の舌は宏の最奥の蕾を啄んだ

「いやっ・・・あ・・・」

思いもしない場所を存分に嬲られて

宏は左右に頭をふり 乱れた前髪は白い額に散った

大沢の髪に指を絡ませ引き剥がそうと弱々しくもがくが許されず  
大きく開かされた膝と内腿を押さえ込まれ

宏の昂ぶりは蜜を溢れさせ続けた

大沢は宏の先走りの蜜を薙へとやわやわと塗り込み

その入り口を丁寧 to 解し始めた

挿入された大沢の指の感触にぞわりと宏の背中がたわんだ

ゆっくりと解されるうちに 宏の全身から力がかくりと抜けていった  
指は二本に増やされて その圧迫感が腹に迫る

しかしそれがある一点を擦りあげた瞬間

「ひぁあぁっ……」

宏はたまらない愉悦に襲われ一気に押し寄せる射精感に目を見開いた

「ここ……イイの？宏……」

大沢は確かめるようにその一点を執拗に擦りあげた

「いやっ……だ……そこ……だめ……」

言葉とは裏腹に 宏の腰はその刺激を求めるように揺れた

「ゆ……ゆび やだ……もっ……もう」

「ん……宏……力抜いて」

「んん……」

大沢もまた既にはちきれそうな自らの昂ぶりを持て余し

その熱くたぎる自身で宏の蜜を貫いた

ゆっくりと押し広げられてゆく薙がたまらなく淫猥で魅惑的な蠕動  
を見せる

大沢は夢中で宏の身体を抱き締めた

その最奥まで腰を埋めた時 宏の瞳からぼろりと大粒の涙が零れた

「宏……つらい？」

「うっん……平気」

「動いても・・・いい？」

「うん・・・大沢がもつと欲しいよ・・・」

「煽るな・・・いきそうになる」

大沢はじらすように腰をゆすりあげ 宏の内側の一点を刺激し続けた  
甘く痺れるようなその刺激に宏の腰はくだけたように震えた

耳朵を甘噛みされ 唇を奪われ

最奥を貫かれたまま 昂ぶりを大沢の手によって擦りあげられた

「もっ・・・イク・・・いかせて・・・」

宏の甘い声が掠れ 大沢もまた限界を迎えた

大沢の背中に爪をたて

力の限りに抱き締め合ったまま 二人は同時に白い飛沫を放っていた  
身体の奥で弾けた大沢の熱を感じ

宏は今までにない幸福感を味わっていた

## 26・青春という名の日々に

26・青春という名の日々に

遠い日の想い出　青春という名の日々に出逢った少年たちの  
その後を私は知らない

二人で暮らす事にしました　近くに来たときには寄って下さい  
そんな簡単なハガキが届いたのは　大沢が退院してから  
三ヶ月程たった頃だったと思う

私は彼らを訪ねる事はしなかった

そうして　掛け違えたボタンのように彼らとの接点は遠のき  
私は自分の人生における彼らの存在を過去に置き去りにした  
恋しくてたまらない少年たち  
愛しくて仕方のない少年たち  
そんな二人を私は忘却の彼方へと押しやった

少しはその面影を捜していたのかもしれない

その後　私は　一人の青年と恋をした

彼は落ち着いた人柄が大沢を思い起こさせ

優しい笑顔が宏に少し似ていた

私は彼と家庭を築く誓いをした

病めるときも健やかなる時も　常に汝これを愛すると誓うか  
はい　と応えた一瞬　脳裏に二人の少年の顔が浮かんだ

顔を覆う白いベールをあげられて

静かな口づけに愛を誓った一瞬に

私は彼らの事を思った

彼らは

どんな人生を辿るのだろうか

恋が許す範囲を踏み出した時 彼らの前に果てしなく広がる未来は  
決して平坦なものではないだろう

彼らは手をつなぎ その道のりを超えてゆくのだろうか

今

穏やかな愛に包まれて 平穏な日々の中ゆるりと流れる時に身を任せ  
ぬるま湯につかったような心地よさと

日だまりでまどろむような穏やかさに慣れてしまいそうになる

そうして あの胸を焦がし 涙した日々を懐かしく思い出す

恋はきらきらと美しく その期間限定のトキメキは強かで残酷だ  
彼らを その残酷な時が引き裂く事がないように

彼らもまた いつかこの穏やかな時の流れに身を任せる日を迎えま  
すように

私はそう祈らずにはいられない

彼らに会いたいと思う

でも

私の前にもう彼らはいない

風の便りに 大沢が弁護士になったと聞いた

宏はモデルから俳優への転身をはかり それなりの成功を収めたら  
しい

テレビに無縁な生活を送る私は なかなか  
その懐かしい顔に出会えずにいた

しかし 書店に並ぶファッション誌の表紙を飾る彼を見かけると  
懐かしく また嬉しくて嬉しくて 二もなく買い求めたりもした

現実感が今ひとつ伴わないものの

見かける宏の姿はどれも自信に満ちあふれて  
希望と夢と愛を全身に満たしているように見えた

二人がこれからもずっと 共にその人生を歩んでいきますように  
何者をも彼ら二人をわかっ事ができないように

また 彼らのどちらかが先にこの世を去る事もないように  
私は 出来うる限りの祈りを心に唱えていた

青春という名の日々に

私の出逢った二人の少年

彼らの人生に幸せな日々が在らん事を祈る

F i n

## 26・青春という名の日々に（後書き）

最期までお付き合い頂きましてありがとうございます  
感想・コメント・批判・ご意見 何でも結構です  
どうぞ一言 tensuke へお聞かせ下さいませ  
よろしくお願い致します



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9344d/>

---

青春という名の日々に

2010年10月17日02時46分発行